登場人物

本庄しおり（17）高校二年生
住吉小春（16）右同
手塚千里（16）右同
黒田篤希（16）右同
菅原澪（16）右同

岡村涼子（53）校長
板倉深雪（30）涼子の元教え子
村田由香（29）キックボクシングジムトレーナー
本庄裕子（47）しおりの母
光太（13）しおりの弟
住吉正敏（52）小春の父
幸世（44）小春の継母
島岡憲一（30）小春の伯父
黒田貞明（52）篤希の父
雪岡アリス（16）高校二年生
工藤（58）校務員
遠藤（50）ミュージックディレクター
内藤（40）スタジオピアニスト
小鳥遊（27）レコード会社受付嬢
杉本（34）レコード会社サブプロデューサー
大谷（48）キックボクシングジム会長
船田（35）カラオケ店店主
横山（55）教頭
深雪の恋人
初老の男
男子生徒①～⑥
小学生たち
その他

1××高校・校庭（朝）
満開の桜並木。その中を登校して来る生徒たち。

2同・校長室
整理、掃除のゆきとどいた室内。登校する生徒たちの嬌声が聞こえてくる。
新任校長岡村涼子（53）が窓際に立って登校風景を見ている。

3同・体育館
始業式。全校生徒が集まっている体育館。ざわつく中、登壇する涼子、演台の前に立つ。
涼子「初めましてみなさん。この度、本校の校長として赴任いたしました、岡村涼子です――。あ、一年生のみんなとは入学式のとき顔合わせてるんだよね。えーっと、みんなさ、嫌いだよね、校長先生のグダグダした長話なんてさ。わたしも学生時代大嫌いだったからよく分かる、うん。だから大事なことを最初にひとつ言います。校長室の扉は常に開いてます。いつでも話しをしに来てください。わたしは、みなさんと友達になりたいと本気で思ってます。」
唖然となる全校生徒と教職員たち。嫣然と笑う涼子。

4メインタイトル
《ＳＨＵＦＦＬＥ！，９２》

5しおりの家・彼女の部屋（夜）
ベッドの上、パジャマ姿で寝転がっているしおり。尾崎豊の『十七歳の地図』を聴いている。曲が終わり、起き上が

るしおり。CDのストップボタンを押し、部屋を出る。

6同・階段を降りたところ

電話をかけているしおり。

しおり「もしもし。佐川さんのお宅でしょうか。夜遅くすみません。わたし、尚子さんと中学校の時いっしょだった本庄といいます。尚子さんおられますでしょうか。はい、すみません——ああ、ナオ、久しぶりだね。元気だった。うん。わたし？　何とかやってる。学校？　うん。けっこうつまんない。あのさ——オザキ、死んじゃったね。うん。何か、まだ信じらんなくてさ。ちょっと電話したんだけど——え、あ、そうなの。ああ、そうなんだ。ゴメン。じゃあ、切るね。また今度。ゆっくり。うん。それじゃ」

受話器を置くしおり。玄関扉が開き、母親の裕子（47）が帰ってくる。

裕子「ただいま～。あら、あんたこんなとこで何やってんの」

しおり「ちょっと電話」

裕子「珍しい。だれに」

しおり「ナオ」

裕子「ナオって、中学校のとき仲よかった佐川尚子さん？」

しおり「うん」

裕子「へ～え。元気だった」

しおり「うん」

裕子「そう。また家遊びに寄ってもらいなさいな」

しおり「—うん」

裕子「遅くなってゴメン。レジのバイトの子が急に都合悪くなったなんて連絡いれてきてさあ。ほんと責任感がない、今の若い子

って――お風呂は」
しおり「入った」
裕子「光太も？」
しおり「うん。お父さんは何か新人の歓迎会で今日も遅くなるって」
裕子「ハァ、いい気なもんだ。こちとらタイムカード打ってから残業してるってのに。すぐご飯にするから、もうちょっと待ってて」
しおり「うん、いいよ。あんまりおなかへってないし」
階段を上っていくしおり。
裕子「しおり」
振り返るしおり。
裕子「誕生日、おめでとう」
しおり「うん」
また階段を昇っていくしおり。
しおり（M、モノローグ）〈中学の時、わたしにオザキを教えてくれたナオは、この時間毎日かかってくるという、彼氏からの電話を待っていた。オザキが死んだことには興味なさそうだった。そしてわたしのことも――〉

7同・彼女の部屋
部屋に戻ってきたしおり。CDプレーヤーを操作する。『僕が僕であるために』が流れ始める。
しおり「……『僕がぼくであるために　勝ち続けなきゃならない　正しいものは何なのか　それがこの胸に分かるまで　僕は街にのまれて　少し心許しながら　この冷たい街の風に　歌い続けてる』……嘘つき」
曲が流れ続ける中、立ちつくしたままでいるしおり。

8××高校　校長室前（放課後）
校長室扉に〈welcome〉と書かれた札が下げられている。

9同・校長室中
デスクの前に座り、ファイルに収めた生徒からのアンケートを読んでいる涼子。職員室と通じているドアが開き、教頭の横山（55）が入ってくる。

横山「校長先生」
涼子「（ファイルから顔を上げ）ああ、はい」
横山「それが全校生徒アンケートですか」
涼子「二年生の分を見終えたところです」
横山「校長室にやってきた生徒は？」
涼子「いいえ、まだ、だれも」
横山「そうですか――いや、今日はひとつわたしの見解も聞いていただいておいた方がいいかと思いまして。理想を高く持たれるのは大いにけっこうだとは思います。ですが今、本校生徒に本当に必要なのは、純朴、鍛錬、規律の精神なのではないかと」
涼子「――純朴、鍛錬、規律、ね」
横山「はい。本校には昨年まで校訓がありませんでした。そこで前任の井上校長が生徒の為を思い退職される前に置きみやげとしてこの三訓を遺されました。今一度生徒たちにこの校訓の精神を――」
涼子「（遮って）井上先生は、わたしの高校二年のときの担任でした」
（額に入って飾られた前任校長井上が厳しい顔した肖像写真が映る）
横山「ああ、そうだったんですか」
涼子「何度も何度も顔叩かれましたよ。わたし、高校時代けっこうヤンチャでしたから

ね。三年生になってクラスかわってからも
叩かれました。痛いんですよ、胸倉つかま
れてされる若い体育教師からの往復ビンタ
って。お腹蹴られて吐いた仲間もいました。
わたし教師になれたとき誓ったんです。絶
対、あの井上のような教師にだけは、いえ、
あんな社会人だけにはなるまいって。皮肉
なもんですよね。その井上が校長だった学
校にこっちも校長として就任するなんて」
鼻白む横山。
涼子「引き継ぎのときに顔合せたんですけど
ね、わたしのこと覚えてませんでしたよ、
井上――お話はそれだけでしょうか」
横山「はぁ……」
涼子「ご意見ありがたく承っておきます」
二冊あるファイルの薄い方に目を通し
始める涼子。
横山「失礼します」
納得いかない風情で職員室に戻る横山。
涼子「はい、ご苦労様――死ぬまで言ってろ」
涼子、ファイルを見ながら。
涼子「尾崎豊か――こっちから動くか」
しおりのアンケートが大写しになる。

１０同・二年二組（放課後）
帰り仕度をしているしおり。そこにや
ってくる涼子。驚く周囲の生徒たち。
涼子、しおりの前に立って。
涼子「本庄しおりさんね」
しおり「は、はぁ」
にっこりほほ笑む涼子。

１１同・校長室
机を挟み、応接用ソファに向いあって
座っている涼子としおり。

涼子「誰もあそびに来てくれないから無理や
　り呼んじゃった」
しおり「あの――」
涼子「何、何か質問？」
しおり「――何でわたしをここに」
涼子「不思議？」
しおり「そりゃまあ」
涼子「そんなこと何だっていいじゃない。何
　でもいいからわたしに話してよ」
しおり「話してよって、わたしべつに……」
涼子「わたしに話す事なんて何もない？」
しおり「……」
涼子「冷たいなあ」
しおり「冷たいって……」
涼子「あなた、尾崎豊好きなのね」
　　驚いて涼子を見つめるしおり。
涼子「そんなに驚かなくてもいいじゃない。
　だってアンケートに応えてくれてたでしょ。
　どんな音楽聞くのかって質問に」
しおり「まあ、そうですけど」
涼子「けっこう熱心なファン？」
しおり「熱心っていうか、まあ今までのアル
　バムは全部持ってます」
涼子「へ～え。コンサートとかは」
しおり「それは、行ったことありません」
涼子「そっか」
しおり「オザキのコンサート、いつか行くの
　が夢だったけど、もう、絶対に行けません」
涼子「ニュースで見たわ。民家の庭に倒れて
　たんだよね」
　　頷くしおり。
しおり「わたし、オザキが死んだなんて全然
　信じられなくて。それで、中学のとき、オ
　ザキ教えてくれたナオに、電話したら、ナ
　オ、彼氏の電話待ってて、オザキのことな

んて、もうあんまり興味ないみたいで。わたし、ナオとオザキのこと、オザキが死んだなんて嘘だって、話したかったのに。いっぱい話したかったのに……ナオとは高校別々になったけど、でも、オザキを教えてくれたナオは……わたし、ナオもずっとオザキ聴き続けてると思ってた。勝手に、そう思ってた――」

しおり（M）〈あれ、わたしなんでこの人にこんなこと喋ってるんだろう〉

立ち上がる涼子。デスクの引き出しを開け、薄いファイルを手にすると、戻ってきてまたソファに座る。ファイルをしおりの前に差し出す。

涼子「これは、ちょっと特別なファイル」

しおり「特別？」

涼子「あなたのアンケートもコピーしてここに入れてあります。他の四人といっしょに」

しおり「わたしの？　あの、他の四人って？」

涼子「開いてみて」

ファイルを手に取り開くしおり。自分のアンケートをじっと見る。

しおり「ほんとだ……」

涼子「クラス順になってるわ。めくってみて」

ファイルをめくっていくしおり。

しおり「二年三組、手塚千里さん……二年五組、黒田篤希さん……二年七組、菅原澪さん……二年八組、住吉小春さん……」

涼子「この中の誰かと話したことは？」

首を横に振るしおり。

涼子「全員の顔は分かる？」

しおり「たぶん……菅原さんは一年のとき同じクラスでした。手塚さんとは中学がいっしょでした」

涼子「でも、ちゃんと話したことはないのね」

しおり「あいさつくらいなら」
涼子「そう――本庄さん」
しおり「はい」
涼子「そのファイルの五人には共通点があります。何か分かる？」
首をふるしおり。
涼子「答えはね、全員クラブ活動をしてないこと。いわゆる帰宅部ってやつね。それからアンケートの『学校は楽しいですか』っていう質問と『学校に友達はいますか』っていう質問に対して何も応えてなかったこと。それは二年生じゃあなた含めたその五人だけ」
しおり「……」
涼子「本庄さん」
しおり「はい」
涼子「あなた、これから放課後、その四人に一人ずつ会って、何やってるか見てきて。でさ、できたら彼女たちと話ししてみてよ」
しおり「え、何で」
涼子「でね、それが終わったら、わたしに知らせて」
しおり「だから何でわたしがそんなこと」
涼子「ふふ。これは『かよわき大人の代弁者』からのミッションです」
しおり「え」
涼子「『卒業』くらいしか知らないけどね、尾崎豊は。でもあれ初めて聞いた時は衝撃受けたわ。こんなふうに真正面から大人に挑んでくる若い子がいるんだって」
しおり「……」
涼子「逃げてもいいわよ」
しおり「逃げるとかって――そうすることの意味が分からないし。だいたい何話せばいいのか――」

涼子「それは自分で考えて。ねぇ、オザキだったらなんて言うだろ。大人からケンカ売られて、意味分からないから逃げるのかって言ったりしないかなあ」
しおり「……」
涼子「分かる？　校長先生、挑発してるんだよ、本庄さんのこと、今」
じっと見つめあう二人。
×　×　×
ドアの前に向いあって立つ二人。
涼子「今日は本庄さんとお話できて楽しかったわ」
しおり「わたしは別に――目的があったんですね、わたしを呼んだ」
涼子「ふふ、うん。ごめんね」
しおり「その四人に会って何やってるか分かったら、校長先生に言えば、それでいいんですね」
涼子「うん。そうしてちょうだい」
しおり「……逃げたなんて思われるの嫌だから、会うだけですから。ほんとに、何の意味があるんですか、その四人に会うことに」
涼子「さあ」
しおり「さあって……失礼します」
頭を下げて校長室を出て行くしおり。
涼子、デスクの椅子に腰かける。

１２同・廊下
憤然と歩いていくしおり。
しおり（M）〈何なんだいったい、突然呼び付けて。何でちゃんと話ししたこともない子たちに会わなきゃいけないんだ。オザキの名前だして挑発したりして、断れなくして。大人ってやっぱりズルイ〉
しおり「あぁ、もう。会えばいいんでしょ会

えば！」
男子生徒が驚いてしおりを見る。不機嫌な顔で歩き続けるしおり。

13××高校・二年二組（放課後）
帰り仕度をしているしおり。ため息をついて教室を出て行く。

14同・二年三組前の廊下
歩いてきたしおり。教室前で立ち止まる。賑やかな教室。部活動へと向かったり、帰宅したりする生徒たちが教室を出てくる。やがて目当ての手塚千里（16）も。教室前で立ち止まっているしおりに気づかず、廊下を歩いていく。声をかけることができず、その後ろ姿をじっと見ているが、やがて千里の後を追うように歩き始める。

15同・廊下
千里に気づかれないよう距離をとって歩くしおり。

16同・渡り廊下～学生食堂・裏口
学生食堂に入っていく千里。立ち止まるしおり。やがて出て来る千里。ダンボール箱を抱えている。慌てて物陰に隠れるしおり。過ぎて行く千里。また彼女の後を追うように歩いていくしおり。

17同・校舎裏
千里、ウサギ小屋の前にしゃがみこんでいる。ダンボールに入っていた野菜くずを与えたりして、かいがいしくウ

サギたちの世話をしている。その背中をじっと見つめるしおり。千里、気配に気づき振り向く。目が合う二人。
しおり「あ、あ、こんにちは」
不審そうにしおりを見る千里。
しおり「手塚さん、ウサギの世話してるんだ」
答えない千里。黙々と世話を続ける。
しおり、ぎこちなく、千里の側まで近寄る。彼女の側に腰掛ける。
しおり「か、かわいいね」
千里「――覚えてない？」
しおり「え？」
千里「覚えてないよね」
しおり、ウサギ小屋の中にいる六匹のウサギを見る。
しおり「あの、このウサギってもしかして中学の時学校で飼ってた――」
小さく頷き世話を続けるしおり。
しおり「手塚さん、卒業してからもここでずっとウサギの世話を」
千里「ほっといて卒業したら、この子たちみんなきっと死んじゃってる。だからわたしが引き取った」
しおり「そうだったんだ、知らなかった――あの、なんでこれ仕切りして三匹ずつに分けてるの」
千里「雄と雌に分けてる。いっしょにすると交尾して繁殖するから。これ以上増えるとわたしひとりじゃ世話できない」
しおり「そっか。何かすごいね、手塚さん」
千里「――わたしに何か用事？」
しおり「あ、いや、その用事っていうか、何ていうか」
千里「用事ないんだったら、帰ってほしい」
しおり「え――」

水を換えに立ち上がる千里。
千里「本庄さんが何でここ来たか知らないけど、わたしとこの子たちの時間、誰にも邪魔されたくないの」
しおり「――あ、うん、分かった。ごめん」
しおり、立ち上がる。その場を去ろうとする彼女の背に千里、
千里「本庄さん」
しおり「（振り向いて）何」
千里「中学の時、この子たちの世話一度でもしたことある？　餌やりや、水換えや、糞の掃除とか。それから、この子たちの名前、一匹でも覚えてる？」
首を横に振るしおり。小さく頷く千里。
千里「もう二度とここに来ないでね」
背を向け、ウサギの世話に戻る千里。
その背中をしばらくじっと見ていたしおり、その場から立ち去る。

１８同・廊下
歩いていくしおり。
しおり「あ～、もう何だかなぁ」
顔を歪め、頭をぼりぼりと掻きながら。

１９同・廊下（放課後）
黒田篤希（16）の後を気づかれない様に歩くしおり。

２０同・図書室　入口
入っていく篤希。
しおり「文学少女の登場かぁ……」
しおりも入っていく。

２１同・図書室　中
幾人かの生徒はみられるが、閑散とし

たもの。書架の間を歩いていくしおり。
篤希は――いた。部屋一番奥、大机の端の席に座っている。適当に本を手に取り、彼女の斜め向かいの席に座るしおり。ノートを開き、雑誌を幾冊か広げて、熱心にペンをとり続けている篤希。ちらちらと篤希の方に目をやるしおり。
篤希「（顔をあげないまま）何か用事ですか」
しおり「えっ」
篤希「さっきからチラチラ見てますよね、わたしのこと。気になって仕方ないんですけど」
しおり「あ、ご、ごめんなさい」
篤希「席なら腐るほど空いてますよ。別にそこに座らなくてもいいんじゃないですか」
しおり、さすがにムッとして、
しおり「ど、どこに座ろうがわたしの勝手じゃないですか」
篤希、ようやく顔を上げて、しおりの顔を見る。小さく溜息をついてまたペンをとり始める。
しおり「あの、それ、何やってるんです？」
篤希「ああっ、もううるさいですねぇ。何なんですか？　まともに検討できないじゃないですかっ」
しおり「検討？」
篤希、机の上に置いていた雑誌を手に取り、しおりに突きだすようにしておりに見せる。
しおり「え、それって、競馬の、雑誌……」
篤希「そう。知らないでしょうから教えてあげます。今度の日曜、安田記念ってＧＩがあるんです。その検討をしてるんですわたし今。まだ枠順は発表されてないけど、出

走予定馬の前三走までのタイムと着順をチェックしてるんです。前走は上り3ハロンのタイムも確認します。何言ってるかわからないでしょうけど、とても大切な作業何です、これ。だから気を散らされたくないんです。分かります？」
しおり「あ、あなた、競馬、するの」
篤希「予想だけ。実際に馬券買ったりはしません。単勝なら六割、複勝なら七割五分の確立で的中させる自信があります――いけませんか、高校生が競馬の予想しちゃ」
しおり「いや、いけないっていうか、なんていうか――いけなくは、ない。いけなくはないですよね、はい」
篤希、大きく溜息をついてまたペンをとり始める。しおりの方を見ないまま、篤希「向こうの席行ってもらえますか。本当に気が散るから」
しおり「あ、はい。ごめんなさい、でした」
立ち上がるしおり。本を書架に戻すと図書室を出て行く。

２２同・廊下
歩いていくしおり。
しおり「……はぁ、ウサギの次は馬ってか。もうワケ分かんない」
グシャグシャっと髪をかくしおり。

２３同・体育館（放課後）
バレー部、バスケットボール部が練習している体育館。その隅の方で縄跳びをしている菅原澪（16）。
しおり、二階通路に立って、彼女を見ている。二階に上ったボールを拾いにきた一年生の女子バレー部員に声をか

けるしおり。
しおり「ねえ」
バレー部員「はい？」
しおり「あの人、いつもあそこで縄跳びしてるの？」
バレー部員「はい。トレーニングだそうです」
しおり「トレーニング？」
バレー部員「ええ。わたしも先輩から聞いたんですけど、キックボクシングやってるんですって、あの人」
しおり「キックボクシングぅ？！　菅原さんが？」
バレー部員「ええ。ジムにも通ってるそうですよ。そこに行く前に一時間ほどあそこで体ほぐすんですって――あ、見ていてください」
縄跳びを終えた澪。シャドーボクシングを始める。
しおり「ほえぇぇ。キックボクシングかぁ」
バレー部員「何か、かっこいいですよね。ストイックっていうんでしょ、ああいうのって」
立ち去るバレー部員。シャドーボクシングを続ける澪をじっと見つめるしおり。

２４同・廊下
歩いていくしおり。
しおり「しゅっ、しゅしゅっ！」
パンチを繰り出すまねごとをしながら歩いていくしおり。

２５同・二年二組（放課後）
机の上に突っ伏しているしおり。
しおり「はぁ～、最後は何が出てきますかね」
立ち上がる。めんどくさそうに教室を

出て行くしおり。

２６同・二年二組

入っていくしおり。帰り支度をしている住吉小春（16）のところへ行く。

しおり「こんにちは、住吉小春さんですよね」

小春「え、え、あ、はい。何」

しおり「いきなりでごめんなさい。でも単刀直入に訊きます。わたしのこと変な人だと思ってもらっていいです――あなた放課後何してるの。よかったら答えて。答えられなかった答えられないって言って。それでいいから。もうそれでいいことにするから」

しおりをじっと見つめている小春。やがて、にっこりとほほ笑む。

しおり「え、え、何、何なの。何？」

２７帰路

先を歩く小春。弾むような足取り。しおり、戸惑いながら歩く。

しおり（M）〈何だろう、彼女の反応。何なのあの笑いは。明らかにおかしいよね。もしかして変な宗教団体の施設に連れて行かれるとか――いや、それってなくはない。いや、大いにありうる。そうなったら逃げなきゃ、絶対に逃げなきゃ。もしそうだったりしたら一生恨んでやるあの校長〉

小春、振り返ってしおりを手招き。

小春「ほらぁ、早よ、早よぉ」

しおり「う、うん」

２８商店街

入っていく小春。ついていくしおり。

２９カラオケハウス「ミュージック・シップ」

入口
立ち止まる小春。
しおり「え、ここって……」
小春「さ、入ろ」
しおり「あの、住吉さんって」
小春「うち放課後はいっつもここで一人で歌の練習してるんや。うちな、ここ顔パスやねん」
しおり「歌の練習」
小春「なぁ、聴いててくれる？　なぁ、聴いてくれるよね、うちの歌。あ～、えっと、名前なんて言わはるのん」
しおり「あ、本庄しおり、です」
小春「よろしく、本庄さん。さ、入ろぉな」
しおり「あ、うん」
入っていく小春。
小春「よっしゃあ、今日は観客つきやでぇ！」
しおり「歌の、練習――」
続いてしおりも入る。

３０同・受付
小春「チャーッす」
店長・船田（３５）「ああ、小春ちゃん。いらっしゃい」
小春「今日は観客つきや。後でジュースと何かお菓子持ってきてや」
ぎこちなく頭を下げるしおり。受付を通りすぎる小春。しおりもついて行く。
船田「珍しい。小春ちゃんが友達連れてくるなんて」
小春「（振り返って）友達とかやない。さっき知り会ったばっかしやし。なあ」
頷くしおり。廊下を歩いていく二人の後ろ姿を見ながら店長、
船田「さっき知り会ったばっかりって、何じ

ゃそりゃ」

３１同・ボックス内

発声練習をする小春。

小春「ほな、ぼちぼちいかせてもらおかなあ」

マイクを握り、リモコンを操作する小春。『大阪しぐれ』を歌い始める。

しおり「すごっ……」

『おゆき』『みちづれ』『夢追い酒』『なみだ恋』を次々と歌っていく小春。ドアが開いて店長がジュースとスナック菓子を持って入ってくる。

船田「すごいでしょ、小春ちゃん」

しおり「あ、ええ、はい」

船田「初めて歌声聴いた時、鳥肌が立ったよ。本気で演歌歌手目指してるんだって」

しおり「演歌歌手を」

船田「うん。俺、なれると思うよ、彼女」

熱唱する小春を見つめるしおり。小春『なみだ恋』を歌い終えて。

小春「あ～っ、聴いてくれる人がいてるとやっぱり気持ちのこもり方が違うなぁ。なぁ、本庄さん、もっと聴いてくれる？　うちの歌」

しおり、笑って頷く。

×　×　×

椅子に座る小春。

小春「どうやった？」

しおり「すごい」

小春「ほんまに？」

しおり「ほんまに」

小春「ほんまのほんまに？」

しおり「ほんまのほんまに」

笑う二人。

小春「なあ、本庄さんも何か歌いぃな」

しおり「えっ、ダメだよダメだよ。住吉さん
のあんなすごいの聴いた後に歌えないよ」
小春「そんなん関係ないって。せっかくやん。
それに、人の歌聴くのもうちの勉強やし」
しおり「そう、なの」
小春「うん。何か歌ってえや」
しおり「うん、じゃあ」
しおり、カラオケのコード冊子を繰り、
リモコンを操作する。椅子から立ち上
がり、ステージに立つ。尾崎豊の『シ
ェリー』を歌い始める。じっと聴き入
る小春。歌の途中で泣き出すしおり。
絶唱。泣きながら歌い終える。グスグ
ス泣きながら椅子に座るしおり。
小春「負けたわ」
しおり「え?」
小春「うち、泣くほどの気持ち込めて歌うた
ったことなんかない。負けたわ、あんたの
歌に。今日本庄さんの歌聴けて、よかった」

32商店街
並んで歩くしおりと小春。
小春「そっかあ。それでいきなりあんなこと
うちに訊いたんかぁ」
しおり「うん、ごめん」
小春「べつに謝らんでもエエよ。けど、あの
校長も何であんたにそんなこと言うたんか
な」
しおり「それが分からない」
小春「うちは歌さえあったらそれでエエから、
あのアンケートの質問、空欄にしてただけ
やねんけどなあ。高校入るときこっち越し
てきて、ツレも何となくできんままやった
だけやねんけど」
しおり「――楽しくないよね、学校」

小春「う～ん、そんなんあんまり考えたことないなあ。オトンと二代目オカンが高校だけは出とけっていうから行ってるだけやから、うちは」
しおり「二代目オカン？」
小春「なぁ、ちょっとうち寄って行かへん？」

３３居酒屋〈たんぽぽ〉入口
　準備中の札が掛かっている入口を開ける小春。
小春「ただいま～。さ、入って」
　おずおずと続いて入るしおり。

３４同・店内
　仕込みをしている小春の継母、幸世（44）。カウンター席に座り、ギターをつま弾いている父正敏（52）。
幸世「おかえり。あら、そちらは」
小春「本庄しおりさん」
しおり「はじめまして、本庄です」
幸世「お友達？」
　顔を見交す二人。
正敏「ツレができたんか、おまえ」
小春「――うん。みたい」
正敏「そうかぁ」
小春「うん。本庄さん、ちょっと待ってて」
　店から家屋の方に入る小春。
幸世「どうぞ、本庄さん座って」
しおり「あ、はい」
　カウンター席に腰掛けるしおり。仏壇の鈴の音が聞こえる。
幸世「ご飯食べていってね」
しおり「あ、いいですいいですそんな」
幸世「遠慮しないで。居酒屋の賄いご飯だからお口に合うか分からないけど」

正敏「遠慮せんでもエエ。晩げにツレとこ遊びに来た子ぉは、その家のご飯食べて帰るもんや。一億万年前から決まったぁる――なあ、本庄さん」
しおり「はい」
正敏「小春と、ええツレになったってな。幸世、冷やで一杯くれ」
幸世「まだ早い。呑むのは八時回ってからって約束でしょ」
正敏「かまへん。今日は特別や、ほら」
幸世「もう」
正敏のさしだしたコップに酒を注ぐ幸世。小春が戻ってくる。
小春「あ～っ、オトンもうお酒飲んでるっ！」
正敏「やかまし。祝杯上げてるんじゃワシは。なあ、本庄さん」
しおり「はぁ……」

× × ×

正敏のギター伴奏で『まわり道』を歌う小春。
しおり（M）〈ツレに、なったのかな、わたしと住吉さん。でも、彼女の歌がホンモノだってことは、分かる。少なくともあの校長よりはホンモノだ。でも、あの校長にあんなこと言われてなけりゃ、住吉さんとも知りあってなかったわけで。ああ、もう何が何だか分かんない。とにかく彼女の歌がホンモノなのは事実だ。あ、それから二代目オカンのつくってくれた賄いご飯は豪勢でとびきりおいしかった〉
歌い終わった小春に拍手を送るしおり。
（F・O）

３５アパート・板倉深雪宅〈二階〉入口（夕）
呼び鈴を押す涼子。扉が開く。立って

いる板倉深雪（30）。二人、見つめあって。

36同・中、居間

向かい合わせに座っている涼子と深雪。それぞれの前に湯呑み。

深雪「校長就任、おめでとうございます」

涼子「ありがとう」

深雪「したんですか、全校生徒アンケート」

涼子「うん、した」

深雪「いじめを訴えてきた子は？」

涼子「それは、いなかった」

深雪「言いにくいんですよね、先生には。まして校長先生とくれば余計に」

涼子「……心を砕いていくつもりよ、何よりも」

深雪「そう。せいぜい頑張ってください」

涼子「――うん。でも学校に友達や仲間のいない女の子の生徒が五人いた」

深雪「へえ。一人でいるのが楽しいんじゃないですか、そういう子たちって」

涼子「あなたは？」

深雪「え」

涼子「あなたは一人でいて楽しかった？」

深雪「何わたしに質問なんかしてるんです、先生」

涼子「――ごめんなさい」

深雪「楽しいとか、楽しくないとか、そういう世界で生きてたと思います、わたし」

涼子「ごめんなさい」

深雪「――何とかするつもりなんですか、その五人のこと」

涼子「うん、できれば」

深雪「今更ながらのおせっかいですか」

涼子「――そうね」

深雪「ふふふ」
お茶を飲む深雪をじっと見つめる涼子。
（F・O）

37××高校・校長室（放課後）
デスクを前に座っている涼子。その前に立っているしおり。
涼子「ウサギの飼育に競馬の予想にキックボクシングの練習にカラオケで演歌かぁ。予想以上に面白い結果が出たわねぇ」
しおり「あの、もうこれでいいですか」
涼子「じゃあ住吉さんとは友達になれたんだ」
しおり「はぁ、まあ。関西弁ではツレっていうらしいですけど」
涼子「ツレ、かぁ。何かいいねそれ。他の三人とは何か話しした？」
しおり「……菅原さんには話しかけられませんでした。あとの二人からは、完全に拒否られました」
涼子「そう」
しおり「わたし、もう他の三人に会ったり話したりするつもりありませんから」
涼子「はい、分かりました。本庄さん」
しおり「はい」
涼子「明日、この時間にもう一度ここに来て」
しおり「え、なんでですか」
涼子「なんでもいいじゃない」
しおり「そればっかり――嫌だって言ったら」
涼子「校内放送で呼び出す」
微笑む涼子を睨みつけるしおり。

38校長室（放課後）
しおり「失礼します」
ノックをして中に入るしおり。
デスクの前に立っていた、小春、千里、

篤希、澪が振り返りしおりを見る。
しおり「えっ……」
デスクの椅子に座っている涼子。
涼子「遅刻よ。後三分待って来なかったら放送室に行こうって思ってたとこ」
× × ×
五人、涼子の前に並んで立っている。
涼子「ということでですね、本庄さんの見事なスパイ活動によりあなた方が放課後それぞれ何をしているか分かりました」
しおり「……スパイって」
涼子「ふふ、冗談よ」
篤希「あの」
涼子「何」
篤希「停学でしょうか、わたし」
涼子「何で」
篤希「何でって、それはやっぱり高校生が競馬の予想なんてしてるのは……」
涼子「馬券買ったりはしてないんでしょ」
篤希「はい」
涼子「だったら何の問題もないわ。だけどその分勉強もしっかり――って、入学以来学年トップから落ちたことのないあなたにはよけいなお世話かしらね」
千里「わたしは……」
涼子「何、手塚さん。校内でウサギ飼ってること？」
千里「はい」
涼子「立派よ。中学校で飼ってたウサギ引き取って一人で飼育してるなんて、そうそうできることじゃない。もちろん禁止したりしない。これからも面倒みてあげて」
千里「……はい」
涼子「で、ですね。わたしから提案があります」

デスクの上に[写ルンです]を置く涼子。
涼子「これから――そうね、とりあえず二学期の始業式、九月一日までこれにあなたたちの写真たくさん撮りなさい」
澪「……どういう、ことですか」
涼子「どういうことも何もそういうことよ」
篤希「意味が分からないのですが」
涼子「ハァ、何であなたたちってそう意味ばっかり求めたがるのかなあ。とにかくやってみなさいよ。はい、校長先生のお話は以上で終わり。それぞれの場所に戻ってもらってけっこうです――あ、そうだ、せっかくだから記念の一枚目、先生が撮ってあげよう」
[写ルンです]を手に椅子から立ち上がる涼子。並ぶ五人の前に立つ。
涼子「はい笑って笑って～～ってまだ笑えないかぁ。まあいいや、ざーとらしく笑うのばかりが記念写真じゃないぞっと。はいチーズ」
シャッターを切る涼子。[写ルンです]をしおりに手渡す。
涼子「はい」
しおり「え」
涼子「あなたが持ってなさい」

39同・校長室前廊下
出て来た五人。しおりの前に立つ澪、篤希、千里。
澪「どういうこと」
しおり「ごめん……」
千里「いきなり小屋の前に来たからおかしいと思ってた。校長先生に言われてこそこそかぎまわってたんだね、わたしたちのこと」
しおり「ごめんなさい」

篤希「最低ね、あなた」
澪「写真なんか撮らないから」
しおり「……うん」
篤希「とにかく、これで終わりだから」
頷く澪と千里。
しおり「うん、分かってる、ごめん」
小春「許されへん」
しおり「え」
小春「あんなんわたし、絶対許されへん」
ノックもせず校長室のドアを開け、開け放ったまま校長室に再び入る小春。

４０同・校長室
座っていた涼子顔を上げる。その前まで来る小春。
涼子「どうしました、住吉さん。入る時はせめてノックくらいはしましょうね」
小春「取り消してください」
涼子「え？」
小春「さっき本庄さん――しおりのこと『スパイ』って言ったこと、取り消してください。そんで謝ってください、しおりに」
涼子「だからあれは冗談だって――」
小春「しおりは、校長先生に言われて、言う通りに動いただけやないですか。それをスパイやなんて、ひどすぎるやないですか。今しおり、菅原さんと黒田さんと手塚さんから責められてます。最低やって言われてます。そんなことになったん、校長先生のせいやないですか。なんでしおりがそんなん言われなアカンのですか」
涼子「……」
小春「黙ってへんと答えろや！　冗談やと？言うてエエ冗談とアカン冗談があるやろ！人いちびるんも大概にせえや！　取り消せ

やっ、しおりに謝れやっ！　ああっ！」
立ち上がる涼子。二人の様子を茫然と
見ていた四人の前まで歩く。

４１同・校長室前廊下
しおりの前に立つ涼子。
涼子「本庄さん。スパイだなんて言ってごめ
んなさい。あれは完全にわたしの失言でし
た。取り消して謝ります。許してください」
深々と頭を下げる涼子。
しおり「もう、いいです」
頭を上げる涼子。
涼子「嫌な思いをさせてしまったわね」
しおり「そればっかりでもないです。住吉さ
んとも――ツレになれたから」
戻ってくる小春。
小春「小春でエエよ。昔から嫌いやねん。『
住吉さん』って言われるの、お賽銭ももら
われへんのに」
しおり「え？」
小春「……分からんかったらエエ」
涼子「（三人を見て）あなたたちにも不快な
思いをさせてしまいました。ごめんなさい。
本庄さんのことは責めないであげて。彼女
はわたしに言われたことをしただけで、何
も悪くないの。わたし、少しでも知りたか
ったのよ、あなたたちのことが」
三人「……」
しおり「校長先生」
涼子「何」
しおり「今ここで話してたんですけど、写真
はきっと無理だと思います」
[写ルンです]を涼子に返そうとするしおり。
涼子「うん、分かった。でも、せっかくだか
らそれはあなたにあげる」

しおり「――じゃあ、これで帰ります。みんな、本当にごめんね」
三人に頭を下げるしおり。
小春「もうエエもうエエ。終わりや、これで終わり。こんなときこそ歌や歌！　歌ってスカッとしよかぁ。なあ、しおり！」
肩を並べて帰っていくしおりと小春。
小春「『アイラブユー　今だけは悲しい歌聞きたくないよ～』」
しおり「もう、だからやめてよ、こぶし回してオザキ歌うのはぁ」
二人の背中を見つめている四人。
涼子「ド迫力だったねぇ住吉さん。おしっこちびりそうになっちゃったわ――ねぇ、関西弁でね、友達のことをツレっていうんだって。なかなかいいもんだって思わない、ツレってのもさ」
無言の三人。

42小春が歌っているストップショットやしおりが歌うストップショットにしおりのモノローグがかぶさる。
しおり（M）〈こうやってわたしと小春はまあツレになり、放課後は小春顔パスのカラオケハウスで過ごすことが多くなった。何でも小春は本当のオカンとは四つの時に死に分かれ、十歳のときに二代目オカンとオトンが再婚したそうだ。まあそれなりにいろいろあったみたいだが、今は二代目オカンのことが好きだと言っていた。ちなみにオトンは体が弱く、働いていないらしい。で、夜になると小春は店で八時までオトンのギター伴奏で演歌を歌ってるんだって。お客さんからご祝儀をもらうこともあるらしい。すごいよね、もう自分の歌でお金稼

いでるんだもん小春ってば。演歌歌手になるんだっていうときの小春の目はキラキラ輝いている。少女マンガの登場人物みたいにホントに目の中に星が飛び散ってるみたい。あ、でもロックやポップスはてんでダメ。絶対こぶしまわしちゃうから――ちなみにわたしも小春も、あの三人とはあれから一度も会ってない。きっともう二度と話しすることもない、って思ってたんだけどさあ……〉

43××高校・二年二組教室（放課後）

帰り仕度をしているしおりのところへやってくる小春。

小春「さあ、今日も歌いに行こかぁ」

しおり「期末テストも近いというのに……」

小春「期末テスト？　何それ。おいしい食べもんか何かか？」

しおり「無敵だねあんた」

小春「赤点が怖ぁて北原ミレイが歌えるかぁ」

しおり「ごめん。意味が全然分からない」

小春「ほなあんた、今から帰ったらマジメにお勉強するんやな」

しおり「……しない」

小春「そやろぉ。さ、ぐだぐだ言うてんと行くで。今日はな、演歌はやめ。ロックとポップス限定や」

しおり「え、何でまた」

小春「ミュージックフェアや」

しおり「ミュージックフェア？」

小春「せや。あの番組に出たら、演歌歌手もポップスやニューミュージック歌わなあかんことがあるからな」

しおり「そのための練習するってわけ？」

大真面目な顔で頷く小春。

４４同・学生食堂裏口
餌の入った段ボール箱を抱えて出て来る千里。

４５同・校舎裏
ウサギ小屋に近寄る千里の足が止まる。鍵が破壊され開いている小屋の入口。中にウサギは一匹もいない。慌てて小屋に近寄る千里。
千里「うそ、うそ……」

４６同・二年二組
教室を出ていこうとしている二人。
しおり「しかたない、こぶしの効きまくったポップスを聴いてあげますかぁ」
小春「そやからぁ、今日は大丈夫やって。『15の夜』も歌たる」
しおり「それだけはやめて」
小春「何でぇ、失礼やなぁ」

４７同・廊下
息を切らせ走る千春。

４８同・二年二組を出たあたりの廊下
やってくる千里。
千里「本庄さん」
しおり「手塚さん」
小春「何や、あんた」
千里「……いないの」
しおり「え」
千里「いないの、ウサギが。小屋の入口が壊されてて、みんないなくなってるの」
しおり「……」
小春「それがどないしてん」

千里「え」
小春「関係ないやん。二度と来るなって言うてんやろしおりに。あんたのウサギがいなくなってようが、それがしおりに何の関係があるねん。何しに来てんよあんた」
千里「……ごめんなさい」
　千里、二人に背を向け去ろうとする。
しおり「待って」
　振り向く千里。
しおり「いっしょに探そう」
小春「しおりぃ」
しおり「関係ないことない。わたし、手塚さんが一人で頑張ってウサギ育ててること知っちゃったもん。関係ないことなんてない」
　しおり、千里に歩み寄っていく。
千里「本庄さん」
小春「うちも知ってしもてるやん……」
しおり「とりあえず校内探そ。ほら、あんたはどうすんのよ。今から歌うたいに行く？」
小春「ハァ……分かったわよぉ。けど手塚さん、はっきり言うとく。あんたが都合ようしおり頼ってきたこと、うちは納得してへん。ただこのまま帰ったら寝ざめが悪いからいっしょに探すだけや、ええな」
千里「うん、ごめんなさい」
　二人と逆方向に駆けだす小春。
しおり「ちょっと、どこ行くのよっ」
小春「あんたの理屈で言うたら関係者あと二人いてるやろっ！」
　廊下を走って行ってしまう小春。
しおり「じゃあ、わたしたちも探そう」
千里「うん……ごめん」
しおり「もういいって。絶対校内いるから、見つけよ」
千里「うん」

廊下を駆けだす二人。

４９同・図書室前
走ってきた小春、立ち止まる。ガラッと勢いよくドアを開ける。

５０前同・中
大机、一番後ろの席に座り競馬の予想をしている篤希。その前に立つ小春。篤希、顔を上げる。見つめあう二人。

５１同・廊下
走って行く小春。

５２同・図書室入口
出て来る篤希、駆けだす。

５３同・体育館
シャドーボクシングをしている澪のところへやってくる小春。澪、気づいて小春を見る。見つめあう二人。

５４同・廊下
走って行く小春。

５５同・体育館入口
駆けだしていく澪。

５６同・廊下
並んで走っているしおりと千里。
しおり「いっしょに探しても効率悪いから、別れて探そう」
千里「うん」
別方向に別れる二人。
×　×　×

走るしおり。
×　×　×
走る千里。
×　×　×
走る小春。
×　×　×
走る篤希。
×　×　×
走る澪。

57同・渡り廊下
澪の足が止まる。男子生徒六人が騒ぎながらウサギを競走させている。
澪「ちょっと」
澪を見る六人組。
澪「どうしたのよそのウサギ」
生徒①「何だおまえ」
澪「どうしたんだって訊いてるの、こっちは」
生徒②「何でおまえにそんなこと答えないといけないんだよ」
澪「小屋の鍵壊してここまで連れてきたのね」
生徒③「分かってるんだったら訊くんじゃねぇよ、バーカ」
ヘラヘラ笑う六人組に近寄っていく澪。
澪「で、遊び道具にしてるのね、今」
生徒⑤「だったらどうなんだよ」
生徒⑥「レースさせてんだよ、金賭けてんだ。邪魔すんな」
澪「今だったら許してあげる。そのウサギ世話してる子に頭下げて謝って、壊した小屋の入口ちゃんと直すっていうなら許してあげる」
顔を見交す六人。笑う。
生徒④「何だおまえ、女のくせしやがってよ」
澪「……そのつもりないのね」

生徒②「だったらどうだってんだよぉ」
澪の目の前に立つ生徒②・
澪「ふんっ！」
澪のボディーブロー。
生徒②「ぶぐうっ！」
崩折れる生徒②・ゲロゲロと嘔吐し、
その場でのたうちまわる。唖然となり
その様を見ている残りの五人。
澪「今のは五割の力で打った。次はそのつも
りはない。体に障害残す覚悟があるんだっ
たらかかってきなよ。」
しおり、千里、小春、篤希が走ってや
ってくる。怯えてかたまっているウサ
ギたちのところへ泣きながら駆け寄る
千里。

58同・校舎裏
校務員の工藤（58）がウサギ小屋の入
口を修理している。それを見ている五
人。
工藤「よっしゃ。ひとまずこれでいいだろ。
まあ今日はとりあえずの修理だ。明日から
な、俺が新しい小屋こさえてやっから」
千里「はい、ありがとうございます」
工藤「こんなことになるんなら、もっと早く
いいの作ってやってりゃよかったなあ」
しおり「あの、校務員さんは知ってたんです
か、手塚さんがここでウサギ飼ってること」
工藤「もちろん。俺も時々世話してるからな。
ほんと偉いよこの子は。夏休みも冬休みも
毎日来て世話してるんだから」
小春「夏休みも冬休みも……」
工藤「たいへんなんだよ、生き物死なせずに
面倒み続けるってのは、根気と覚悟と知識
がないと無理なんだよ――よぉし、いい小

屋つくるぞぉ。あぁ、何か燃えてきたぁ！」
去っていく工藤。
千里「あの、みんな、本当にありがとう」
小春「まあ、何せ見つかってよかった」
立ち去ろうとする篤希。
千里「黒田さん、ありがとう。いっしょに探してくれて」
篤希「……ほんと迷惑、あなたたちって」
立ち去る篤希。
小春「あーっ、かわいくないっ」
しおり「いいじゃんかさ、一生懸命いっしょになって探してくれたんだからさ。何て言ってあの二人説得したのあんた」
小春「あの二人もわたしと同じこと言うた、自分には関係ないって。けどあんたに言われたことそのまま言うた。この子が一人で頑張ってウサギ育ててること知ってしもた以上はもう関係ないことないんやって」
しおり「そしたらいっしょになって探してくれたんだ」
頷く小春。
千里「あの、菅原さんは？」
しおり「あれ、いない。いつの間に」
小春「……『疾風のように現れて　疾風のように去っていく～』月光仮面かあいつは」
しおり「いちいち古いね、あんた」
小春「うるさいわ。でもそんな感じやん。なかなかやりよるなあ、あの子」
千里「わたし、菅原さんにちゃんとお礼言わないと」
しおり「うん。また今度でいいよそれは。ねぇ手塚さん」
千里「何」
しおり「わたしたちにもこれから放課後ウサギの世話のお手伝いさせてよ」

小春「わたしたちって、何勝手に複数形にしとんねん、あんた」
しおり「いいでしょう、歌いに行く前にちょっと手伝えばいいだけのことじゃない。ダメかなあ、手塚さん」
　笑って頷く千里。
千里「じゃあ、名前覚えてあげて」
しおり「うん」
　小屋の前に座る二人。
小春「はぁ……何か言いだしそうな気ぃしてたわ、それ」
千里「雄からいくね、奥にいるのが走太。まん中のがやすべえ。で、今一番手前に来てるのがまる吉」
しおり「走太にやすべえにまる吉――全部同じに見える」
千里「次雌ね。奥でひっついてる向かって右側がやよいで左側がノッコ。で、今まん中で寝てるのがヒメ」
しおり「やよいにノッコにヒメ――やっぱり全部同じに見える」
千里「よく見たら顔も体型も全然違うから。それに性格も」
しおり「そうなんだ」
小春「『そうなんだ』――って大丈夫でしょうかねぇ」
しおり「（振り返って）あんたもちゃんと覚えるんだかんねっ！」
小春「へいへい」
　小春、ウサギ小屋の前に来て屈みこむ。六匹のウサギを見つめる三人。

５９××高校・体育館入口（放課後）
　千里が立っている。トレーニングを終えて出て来る澪。澪に近寄る千里。

千里「あの、菅原さん」
澪「――ああ」
千里「この前はありがとう」
澪「ああ」
　歩き出す澪。追いすがる千里。
千里「あの、菅原さん」
澪「何、まだ何か用事」
　手にしていた袋を差し出す千里。
千里「お礼。クッキー焼いたの。よかったら」
澪「……ごめん、甘いもの食べないようにしてるんだ」
　立ち去る澪を見送る千里。

６０帰路
　歩いていく澪。少し離れて歩く千里。

６１大谷キックボクシングジム
　入っていく澪。立ち止まる千里。

６２同・中
　練習着に着替え、サンドバッグを叩いている澪。

６３同・入口
　練習する澪をじっと見ている千里。
　出て来るトレーナーの村田由香（29）。
由香「入会希望？」
千里「いえ、わたしそんなんじゃ……」
由香「ボクササイズサイズコースもあるよ」
千里「ボクササイズコース、ですか」
由香「そ。蹴って殴ってストレス発散、健康的にシェイプアップ！　ちなみにわたしがコースの主任トレーナー。どう、入んない？」
千里「いえ、わたしはちょっと……あの、今

練習してる彼女もその、ボクササイズコースの人なんでしょうか」
由香「ああ、澪ちゃん？　彼女はね、エキスパートコース。ホントにスパーリング――あ、スパーリングってのは実戦形式の練習ね――そういうのやったりもする。小五の時からうちに来てる」
千里「……あの」
由香「何」
千里「練習、見せてもらっていいですか」

６４同・中

由香といっしょにジムの中に入って来る千里。ブザーが鳴り一分間のインターバル。サンドバッグを叩いていた澪が動きを止める。千里に気づく。頭を下げる千里のところへやってくる澪。
澪「クッキー、そんなに食べてほしいの」
千里「ごめんなさい。わたし、家、こっちだから。だから、菅原さんがここに入って行くの見えて、それで――」
由香「え、何、知り合い？」
澪「同級生」
ブザーが鳴る。サンドバッグのところへ戻り、練習を再開する澪。
由香「何だそうだったの」
千里「あの、菅原さんの練習するの見ててもいいですか」
由香「うん。そこベンチあるから座って見ていいよ――気持ち分かるなあ」
千里「え」
由香「とにかくきれいなんだよ、あの子のバッグ打ち。軸がブレないし、パンチもキックもキレキレだ。見惚れちゃうよね。ゆっくり見てっていいよ。あ、気が向いたら二

階のボクササイズコースも見学にきなよ。
もう少ししたらＯＬさんたちたくさん来て
練習始まるからさ」
サンドバッグを叩き、蹴り続ける澪を
見つめる千里。
×　×　×
澪、パンチングボールを叩いている時
に、練習着の雪岡アリス（16）が現れ
る。
アリス「おはようございま～す」
サンドバッグを叩き始める。澪の動き
が止まり、アリスを睨むような目つき
で見つめる。アリスの猛烈な勢いのパ
ンチとキック。澪、パンチングボール
を叩くのをやめ、アリスの隣でサンド
バッグを叩いている男の練習生のとこ
ろまでいく。
澪「退いて」
練習生を押しのける澪、サンドバッグ
を叩き始める。競うようにサンドバッ
グを叩き蹴る澪とアリス。フロアーの
視線が二人に集まる。圧倒される千里。

６５同・入口
立っている千里。着替えて出て来る澪。
澪「……」
千里「わたし、ファンになっちゃった。菅原
さんの」
澪「ファンって……」
微笑む千里。見つめあう二人。

６６喫茶店『アドラーブル』外景

６７同・中
テーブル席に向いあって座っている二

人。千里は紅茶、澪はバナナジュース
を飲んでいる。
二人「あの」
千里「どうぞ、菅原さんから」
澪「――ウサギ、あれからどうしてる」
千里「みんな元気。あれから本庄さんと住吉
さんが世話の手伝いしてくれるようになっ
て、ずいぶん楽になったの」
澪「そう。あの住吉って関西弁の子、面白い
ね。校長どなりつけたりさ。わたしも殴り
かかられそうな勢いでウサギ探しに行くよ
うに言われたよ」
千里「歌、ものすごく上手いんだよあの子」
澪「歌？　ああ、校長何かそんなこと言って
たね」
千里「うん、この前いっしょにカラオケいっ
てびっくりした。演歌歌手目指してるんだ
って」
澪「演歌歌手か――」
千里「菅原さんは」
澪「え」
千里「その、今日やってたの、キックボクシ
ングでプロになるとか――」
無言でいる澪。
千里「…ごめんなさい。余計なこと訊いて」
澪「女子キックにもプロはある。やり始めて
すぐになりたいって思ったし、なれるって
思った。それが夢だった」
千里「――」
澪「今日ずっとわたしの練習見てたでしょ」
千里「うん」
澪「どうだった。わたしがサンドバッグ叩い
たり蹴ったりするの見て」
千里「どうって？」
澪「どう思ったかひとことで言ってみて」

千里「うん。きれいだった。わたし、キック
ボクシングのことなんか全然わからないけ
ど、トレーナーさんの言ったとおり、見惚
れるくらいだった」
澪「うん。じゃあさ、わたしの隣にいた子の
サンドバッグはどう思った」
千里「え」
澪「いたでしょ、途中から来てわたしの隣で
バッグ打ちしてた子が。あの子の練習をひ
とことで言うとしたら?」
千里「……」
澪「はっきり言っていいよ」
千里「正直に言っていい」
澪「うん」
千里「凄かった。荒々しいっていうか。菅原
さんみたいにきれいだとは思わなかったけ
ど、でも——菅原さんより凄いって思った」
澪「——うん」
千里「ごめんなさい」
澪「いいんだよ。正解だよそれで。わたしさ、
スパーで勝てないんだよ、あいつに」
千里「勝てない」
澪「うん。何回やっても勝てない。ていうか
ボコボコにされる」
千里「菅原さんがボコボコに」
澪「最初はボクササイズコースにいたんだけ
どね、あの子。でも会長が才能見抜いた。
で、あっという間に抜かれた。去年やった
最初のスパーでわたし気絶させられた」
千里「気絶」
澪「それから何度やっても勝てない。会長が
言うには天性のパンチ力、キック力がある
んだって。会長、つきっきりで教えてる。
同じ高二で雪岡アリスっていうんだあの子。
アマチュア大会に出て優勝もしてる」

千里「そうなんだ」
澪「すっごいかわいい顔してるでしょ」
千里「うん」
澪「この前専門誌に取り上げられてたよ『キックの国のアリス』とかって。会長、今度テレビ局があの子の取材に来るとか言ってた」
千里「……」
澪「だから、あいつに勝たないことにはプロも何もないって思ってる、今は。ていうか、あいつ倒せればそれでいいって思ってる」
千里「『キックの国のアリス』――何かそういうのってすごいムカつく」
澪「え？」
千里「見てたのわたし、練習終わったあとね、あのアリスって子『おつかれさまでした～』なんてみんなに可愛く愛想ふりまいちゃって。分かってるんだよね、自分がかわいいってさ。でさ、ジムの男の人みんなデレデレしてて……なんであんなのがいいんだろ男って。ねえ、菅原さん」
澪「何」
千里「あのかわいい顔、ボコボコにしちゃってよ」
　まじまじと千里の顔を見る澪。
澪「あんた、意外と過激なんだね」
　見つめあい、どちらからともなく笑いだす二人。
澪「ねえ、クッキーちょうだい」
千里「あ、うん。でもいいの、ここお店だよ」
澪「いいって。ここのマスターとは昔からの知り合いだから。そんなことで何も言わないよ。練習終わりはいつもここでバナナジュース飲んでるんだ」
千里「そうなんだ。じゃあ」

テーブルの上にクッキーが入った袋を置く千里。
澪「いただきます――おいっしぃ！　え、何これ!?」
千里「よかった」
澪「いや、ほんとマジでおいしいよ、これ」
千里「それね、おからで作ったの」
澪「おから？　おからってあの、おから？」
千里「うん、おから。おばあちゃん直伝のおからクッキー」
澪「おからでクッキーなんてできるんだ」
千里「これだったらカロリーも凄く低いし、砂糖もほんの少ししか使ってないから、菅原さんにはいいかなって思って」
澪「……そうか、ありがとう」
千里「これからも焼いて持ってきていい？」
澪「こっちからお願いするよ。ホントは無性に食べたいときがあるんだよね、こういうのを。でもさぁ、わたし家庭科ずっと1だからなあ。こんなの自分じゃ絶対作れない」
千里「1、なの」
澪「あんたは」
千里「中学のときからずっと10」
澪「……ムカつく」
笑い合う二人。
千里「作る時念を込めるね、アリスに勝てますようにって」
澪「はは、うん」
千里「アリスの顔面崩壊できますようにって」
澪「……わたしより過激だ、あんた」
千里「雰囲気がすごく嫌。チヤホヤされていい気になってバカみたい。あんな子に菅原さんが負けるなんて納得いかない」
澪「次のスパーじゃ負けない。キレとスピードはこっちが上なんだ」

千里「うん。絶対勝てるよ」
澪「うん、絶対に勝つ」

６８校舎裏・ウサギ小屋（放課後）
　ウサギの世話をしているしおりと小春。
小春「だーっ、何でや！」
しおり「何ぃ、びっくりするでしょ」
小春「そやから何でやねん。なんでうちら二人でウサギの世話してるんや」
しおり「何でって」
小春「何で千里居ぃひんねん。あくまでうちらはあの子の手伝いやったはずやろ」
しおり「しかたないでしょ。今日は水曜、月水金はジムの練習があるっていうんだから」
小春「そやからぁ、何で千里がキックボクシングのジムに通わなアカンねんって言うてんの！」
しおり「知らないわよそんなの。ねー、やすべえ、ヒメ」
　新しくなったウサギ小屋の前に屈みこんで、微笑んでウサギたちを見ているしおり。ため息をつく小春。

６９大谷キックボクシングジム・二階
　生き生きした表情でボクササイズをしている千里。

７０同・一階練習場
　サンドバッグを叩き、蹴っている澪。

７１たんぽぽ・店内（夜）
　カウンター席に客が五、六人座っている営業中の店内。カウンター内の幸世。正敏のギター伴奏で『他人船』を歌う小春。歌い終わっての拍手喝采。誇ら

しげな小春。
小春の義兄（幸世の弟）島岡憲一（30）
がビールのグラスを呷り。
憲一「『ひきはな～す　ひきはなす～』かぁ。
俺も勝ち馬からひきはなされて久しいなあ」
憲一の隣の席に座る小春。
小春「どないしたん憲兄ちゃん、えらい景気
悪い顔して」
憲一「景気悪い顔にもなるよ。一年以上勝て
てないんだよ、俺」
小春「何に」
憲一「競馬」
小春「あ、憲兄ちゃん競馬するんやったね」
憲一「うん。けどさあ、勝てないの。ずーっ
と負けてばっかしなの。博才ないのかなあ、
俺って」
幸世「そうよきっと。一生懸命働いて稼いだ
お金ドブに捨ててるみたいなもんよ、バカ
よあんたは」
憲一「うん。俺もさすがにこう負けが続くと
なあ……今度の宝塚記念に負けたらスパッ
と足洗おうかって思っててさあ」
幸世「そうしなさい。それがいい」
憲一「うん。どの馬に介錯してもらおうかな
あ」
つまらなさげにビールを飲む憲一を見
ている小春。やがて浮ぶ笑み。

72××高校・校舎裏（放課後）
新しくなっているウサギ小屋。ウサギ
たちの世話をしているしおり、小春、
千里の三人。
しおり「それが？」
小春「だからやな、予想させるねんあの子に。
そんでその馬券買うねん」

千里「あの子って？」
小春「もう、分からんかなあ。図書室のクロ
　や」
しおり「黒田さんに」
小春「そうや。あの子、あんたに偉そうに言
　うたことあるんやろ、凄い確率で当ててる
　って」
しおり「うん」
小春「それ、証明してもらおやないか、実際
　にうちらの見てる前で」
千里「何か、それっておもしろそう」
小春「やろ。負けてほえ面かくの見たないか
　ぁ、あのスカした秀才の」
しおり「勝ったら？」
小春「それはそれでエエやん。小遣い入って
　くるし」
しおり「ちょっと、本当にお金賭けるの？」
小春「当たり前、買うって言うてるやん。ひ
　とり千円くらいやったら出せるやろ。実際
　に賭けてこそ実力が分かる、そういうもん
　ちゃうん」
しおり「まあ、そうだけど。でもどうやって
　馬券買うの。未成年は買えないよ」
小春「憲兄ちゃんに頼む」
しおり「買ってくれるの」
小春「うちの言うことやったら何でも聞きよ
　る」
千里「ねぇ、その話し、みぃちゃんにも話す
　からさ、乗せてあげてよ」
しおり「みぃちゃんって」
千里「あ、菅原さん」
小春「みぃちゃんって呼んでるんや」
千里「うん」
しおり・小春「へ～～え」
小春「けど、乗ってくるかぁ、あの子が」

千里「きっと。話すとけっこう楽しいんだよ、
みぃちゃんって」
しおり・小春「へ～～え」
照れたように笑う千里。
小春「よっし。じゃあ早速行ってくるかぁ」
しおり「どこへ」
小春「決まってるやん、図書室や」

73同・図書室
いつもの席で予想に勤しんでいる篤希。
歩いてきてその前に立つ小春。篤希、
顔も見ないで。
篤希「何です。またウサギいなくなりました
か――もう探したりしないから、わたし」
小春、ニヤッと笑って。
小春「えらい勝率の予想屋さん、次の日曜の
宝塚記念、何が勝ちますのん？　口ばっか
りやなしに、実力見せてもらえません？」
顔を上げる篤希。不敵な笑みの小春と
見つめあう。

74同・視聴覚教室・前の廊下（日曜昼・宝
塚記念当日）
視聴覚教室前にいる、しおり、小春、
千里、澪。
しおり「日曜なのによく使用許可出たね、こ
こ。鍵持ってるの誰だっけ」
小春「美術の鈴木。大画面で映画観たいんで
すって言うたら簡単にハンコついてくれた
わ。『そう言ってくる生徒が現れるのを待
ってたんだ』とかいうて」
千里「本当は映画の美術監督になりたかった
んだよね、鈴木先生」
小春「らしいね――よく来たね、菅原さん」
澪「嫌いじゃないし、こういうの」

しおり「へ～え」
千里「ね」
小春「お、ご登場」
　　やってくる篤希。
篤希「――大ごとですね」
小春「そりゃＧＩレースですから。さ、入ろうか。もうセッティングは済ませてる」

７５同・視聴覚教室・内
　　横並びに座っている五人。教壇の大画面に映されている競馬中継。宝塚記念パドックの様子が映し出されている。
　　⑫メジロパーマーが大写しになる。
小春「この馬だね」
篤希「そう」
しおり「この馬が勝てばいいの？」
篤希「そう、この馬が勝てばそれでいい」
千里「二着とかは関係ないの」
篤希「関係ない」
澪「分かりやすくていいね、そういうの」
篤希「単勝もちゃんと当てられない人間が、ヒモ探しなんかしちゃいけない」
小春「え」
篤希「何でもない」
　　しおり、篤希の手が震えていることに気づく。
篤希「メジロパーマーは前走の新潟大賞典でもきっちり逃げて勝ってる。メジロマックイーンがいたら鉄板だけど、故障で回避。強い相手もいない。九番人気なんてありえない。みんなどこ見てるんだろう。デキも上々じゃない。勝つのはパーマー。逃げ切って絶対に勝つ」
四人「……」

×　　×　　×

〈第33回宝塚記念〉
実況中継にスタートからから五人の声が折々にかぶさる。
しおり（声）「ホントだ、最初から先頭走るんだ」
小夏（声）「そのまま行ってしまうんやな」
●
澪（声）「3番の馬が来てる」
千里（声）「うん、大丈夫かな」
●
しおり（声）「うわあっ、まだ先頭にいるっ！」
千里（声）「あー、並ばれそう！」
澪（声）「違う、並んでないっ」
小春（声）「まだ先頭や！」
しおり（声）「すごいよっ！」
千里（声）「がんばれ、がんばれっ！」
澪（声）「差がついてる！」
小春（声）「行け行け行け！」
篤希（声）「ラスト二〇〇！」
しおり（声）「走れっ！」
小春（声）「いっけぇ！」
篤希（声）「ラスト一〇〇！」
千里（声）「やった！　いった！　いったよこれ！　いったよね！」
澪（声）「よおぉしっ！」
しおり（声）「ゴール！」
小春（声）「うわあっ！」
千里（声）「勝ったあ！」
×　×　×
大画面の手前まできていた五人。
しおり「勝った！　メジロパーマー勝ったよ黒田さん！」
篤希の両肩を掴むしおり。
篤希「う、うん、メジロパーマー、勝った…

…」
　篤希、その場にへたり込む。
千里「勝ったよ、黒田さん。メジロパーマーがホントに勝った！　メジロパーマーもスゴイけど黒田さんもスゴイ！」
小春「勝ったぁ――あー、でも負けたぁ。あんたに負けたわわたし、ははは っ！」
澪「競馬見るのなんて初めてだけど、こんなに興奮するんだね。逃げ馬ってすごい」
しおり「小春、ねぇ小春」
小春「何、何、何」
しおり「お兄さん、ほんとに馬券買ってるの」
小春「あ――うん。家出た後に憲兄ちゃんのアパート寄って馬券見せてもらった。うちらが千円ずつ出したお金でメジロパーマーの単勝っていうの、それ、五千円買うてた。間違いない。自分も思い切って一万円買ったんやって」
小春「い、いくらになるの、それって」
篤希「レース直前のオッズじゃ二三・一倍」
しおり「え」
篤希「百円買ってたら二三一〇円になる」
千里「じゃあ五〇〇〇円なら……」
篤希「十一万五五〇〇円」
四人「十一万五五〇〇円……」
澪「一人頭だと……」
篤希「千円かける二十三・一の二万三千百円」
小春「ひゃあ、小遣いにしちゃ上出来！」
　笑い合うしおり、小春、千里、澪。
篤希「ちょ、ちょっと、助けて」
しおり「え、どうした黒田さん」
篤希「た、立てない……」
しおり「えっ」
篤希「……わたし、お金賭けて予想してレース見たのなんて、初めてだったから……」

しおり「まさか黒田さん」
頷く篤希。
篤希「……ほんとにあるんだ、腰が抜けるって」
小春「あんた、意外とかわいいところあるやないの」
爆笑する四人。情けない笑みの篤希。

76路上（夕方）
楽しげに歩く五人。〈たんぽぽ〉から五十メートルほど離れた憲一のアパートの前まで来る。
小春「あれぇ、おかしいなあ。勝ったらここで会う約束してたんやけどなぁ」
幸世「何の約束をしてたって、小春ちゃん」
振り向く小春。厳しい顔つきで立っている幸世。その隣の憲一、小春に向かって両手を合わせて頭を下げる。
小春「げげっ」
幸世「みんな、うちに来なさい」

77たんぽぽ入口
準備中の札がかかっている。

78同・中
カウンターに座っている五人と憲一。奥の席に座ってギターをつま弾いている正敏。カウンター内側調理場で厳しい顔して立っている幸世。
幸世「まったく、呆れてものも言えません」
小春「……はい」
幸世「高校生の分際で友達そそのかして馬券買うなんて……道枝さんに顔向けできませんん、わたし」
小春「……あの、オカン」

幸世「何よ」
小春「なんで分かったん、わたしが憲兄ちゃんに馬券買ってもらってるって」
幸世「分からないもんですか。あなたね、朝からそわそわして様子がおかしかったのよ。何で日曜なのに学校に行くのか訊いてもちゃんと答えないし。教えてあげます、あなたが隠し事したり嘘ついたりしてるときは右目を擦る癖があるのよ」
小春「そうなのか……」
幸世「それでピンときたの。で、出て行った後わたしも外出てあなた見てると憲一のアパートに入っていくじゃない。だからあなた出てきてからすぐにこの子の部屋行って問い詰めたのよ。なかなか白状しなかったけどね」
小春「……憲兄ちゃんのバカ」
憲一「ごめん」
幸世「憲一っ」
憲一「……はい」
幸世「どうして小春ちゃんが馬券買ってほしいなんて言ってきたとき断らなかったのよ。未成年の姪っ子なのよ。間違ったことやってるって知ったら叱ってやめさせるのが本当でしょう」
憲一「……はい、すみません」
幸世「そんなだからいつまでたっても彼女のひとりもできないのよ。だいたいあんたは小春ちゃんに甘すぎるの。何でもかんでも言うことときいて。分かってんのこのバカ！」
幸世手を伸ばして憲一の頬を思い切りつねる。
憲一「イテテテテテっ！」
手を離す幸世。
憲一「この年になってアネキのコレを食らう

とは……」
幸世「あんたがバカだからよっ！」
小春「ははははっ」
幸世「笑うところじゃありません！　小春ちゃんもこうです！　これは道枝さんの手だと思いなさい！」
小春の頬もつねる幸世。
小春「イタタタタっ！」
しおり「あの」
小春の頬から手を離す幸世、しおりを見る。
しおり「わたしたちも、悪いんです。いっしょになって、馬券買ったんですから」
千里「そうなんです。誰かがやめとこうって言えばよかったんです。でも、わたしも、なんだか面白そうだって、それで盛り上がっちゃって……」
澪「住吉さんだけが悪くないんです。みんなが悪いんです」
幸世「――そうねぇ。確かにみんなお金だしてるんだから、誰にも責任があるわね。お家の人には黙っててあげるから、ちゃんと反省しなさい。いい。娘を居酒屋で歌わせてるわたしが言っても説得力ないかもしれないけど」
小春「ちゃんと八時には終わってるもん……」
正敏「小春ぅ、おまえいっぺんにぎょうさんええツレができたもんやなぁ」
幸世「もう、あなたからも小春ちゃんにしっかり言ってくれないと困るじゃない」
篤希「――わたしが、いちばん悪いんです」
全員の視線が篤希に集まる。
篤希「高校生なのに競馬の予想なんてしてるわたしが悪いんです。わたしがきっかけなんです。もうやめます、競馬の予想なんて」

しおり「黒田さん」
篤希「だからおばさん、住吉さんのこと、これ以上叱らないでください」
幸世「どうして？」
篤希「え」
幸世「どうしてあなたは競馬の予想なんてやってるの。お金賭けなくても、たしかに高校生の女の子としてはあまりいい趣味とはいえないわ」
篤希「……父が」
幸世「お父さんが？」
篤希「小五の時出て行った父が、大井競馬場で予想屋してるんです」
幸世「予想屋」
篤希「はい」
憲一「ああ、中央では認められてないけど、大井競馬なんかじゃ、公認の予想屋が場内にいるんだよな」
正敏「場立ちの予想屋ってやつやな」
篤希「はい」
幸世「それであなたも競馬の予想を？」
篤希「わたしがやってるのは、土日にある中央競馬の予想です。大井は平日開催で土日は休みだけど、競馬好きの父なら、きっと休みの日も中央の予想して、個人的に馬券買ってると思うんです。父は家族より競馬を選んで家を出て行ったんです。母はそんな父を何て言うか、ひとことで言うと恨んでいます。許していません。でも、わたしは……」
幸世「お父さん、お仕事は何をしてらしたの」
篤希「予備校の講師です」
幸世「そう。あなたお父さんのことが今でも大好きなのね」
正敏「予想で、親父さんと繋がってるような

気がするねんな」
降りて来る沈黙。
幸世「やめることないわ、競馬の予想」
篤希「……はい、やめたく、ないんです」

79同・入口
店から出て来た五人。
小春「黒田さん、ごめんな」
篤希「え、何が」
小春「いや、何か、なぁ、やっぱり、なぁ。
事情も知らんとなぁ、わたし」
篤希「いいよ、別に。口ばっかりじゃないと
ころちゃんと見せられたし」
小春「……やっぱりあんたってかわいくない」
じっと見つめあい、笑いだす二人。
小春「しかし二万三千百円、惜しいなあ」
しおり「しかたないよ、おばさんの言うこと
が正しいよ」
千里「うん。二十歳になった時にここに来た
ら渡してくれるっていうんだから」
澪「洒落てるよね、そういうの」
小春「まあ、あのオカンがその金に手をつけ
ることはないから安心しといてや」
しおり「信頼してるんだ」
小春「そらまあ、血は繋がってなくてもオカ
ンはオカンやからな——あー、つねられた
とこまだ痛い」
篤希「二十歳かぁ。どうなってるんだろうわ
たし」
黙り込む五人。入口が開いて浮かない
顔の憲一が出て来る。
小春「あ、憲兄ちゃん。ほら、黒田さんにお
礼言ってちゃんと。なんせ二三万千円も勝
たしてもらってんから」
憲一「あ、あ、うん。ありがとうね。すごか

ったねパーマー」
小春「何ぃ、相変わらずの景気悪い顔して。
オカンに叱られたんがそんなショック？」
憲一「いや、そうじゃなくてさ。俺、アネキ
に馬券、取られた」
小春「取られたぁ？」
憲一「うん。次の休み、ウインズにいっしょ
に換金に行くって。そんでその金、アネキ
が管理するって」
小春「それで馬券オカンに渡したん？」
憲一「うん。どうせロクな事に使わないに決
まってるから、毎月二千円ずつ渡す事にす
るってよ……まったく子供の小遣いじゃな
いんだからさぁ」
話しを聞いていた五人、爆笑。
憲一「いや、君たち笑うけどさあ。最悪だよ
ホント。二三万も勝ったってのに……」
しおり「あ、そうだ」
しおり、ポケットから[写ルンです]を
取り出す。
しおり「せっかくだから、撮ろっか、これで」
小春「え、あんたまだそんなん持ってたん？」
しおり「一応、ずっと持ち歩いてる」
澪「そうなんだ」
しおり「憲一さん、これでわたしたちのこと、
撮ってもらえます」
[写ルンです]を憲一に手渡すしおり。
憲一「ああ、いいけど」
しおり「じゃあ、みんな、並んで並んで、ほ
ら、黒田さんも早く」
篤希「うん」
〈たんぽぽ〉前に集合する五人。
篤希「あれが最初で最後じゃなかったのか」
しおり「え」
澪「うん、不思議なもんだ」

小春「なあ、これ、出来た写真にタイトルつけるとしたら？」
千里「そりゃやっぱりメジロパーマー優勝記念じゃない？」
澪「イマイチ面白くないなあ。小春のオカンに叱られ記念ってのは？」
篤希「いいね、それ」
しおり「あ、だったらさあ、こっちのほうが絶対いい！」
小春「何」
しおり「憲一兄ちゃんお小遣い二千円記念！」
憲一「うるっせぇよっ！」
シャッター音が鳴る。爆笑している五人のストップショット。

８０××高校・校舎裏（放課後）
ウサギの世話をしているしおり、小春、澪、篤希の四人。
小春「だーっ、だから何でやっ！」
しおり「何ぃ、びっくりするでしょ」
小春「だから何で千里居ぃひんねん！　ほんでなんであんたら二人がいてんねん！」
しおり「だから千里はボクササイズの日だって言ってるでしょ」
澪「燃えてるからね、あの子。始めてから四キロ痩せたって言ってた」
小春「あんたはよ」
澪「え」
小春「あんたは練習行かんでエエのかいな？」
澪「ああ、今日は研修とかでエキスパートの方のトレーナー全員出はらってて、休みなんだよ」
小春「ふ～ん。で、何であんたがおんねん」
篤希「いちゃダメなの」
小春「いや、ダメってわけやないけど、競馬

の予想は？」
篤希「宝塚記念で春のＧＩシリーズも終わったし、ここでちょっと息抜こうと思ってねってね」
小春「ふ～ん」
しおり「小春、アツはもう六匹全部の顔と名前一致させちゃったよ。あんたなんて未だにノッコと走太の区別もつかないじゃない」
篤希「え～そうなの。一目見ただけで全然違うじゃん」
小春「うるっさいわ……」
しおり「ほら、そんなところでボーっと突っ立ってないで早く水換えてきてよ」
小春「へいへい。全くなんだかなぁ」
楽しげにウサギの世話をする四人。

８１大谷キックボクシングジム・二階
生き生きした表情でボクササイズをしている千里。

８２××高校・校庭（昼、終業式後）
帰宅する生徒たちの中、五人も並んで歩いている。
しおり「じゃあ月曜日はわたし、火曜日は小春、水曜日は澪で木曜日はアツ。でもって金曜から日曜は千里。これでいいね」
小春「千里、あんた三日もやで」
千里「いいって。責任者っていうか、そういうのはやっぱりわたしなんだから。それに今までは毎日ずっと一人でやってたんだし」
篤希「偉いよね。夏休みも冬休みも学校来て一人で世話してたんだもんね、今まで」
千里「動物にはお盆もお正月もないから」
篤希「なるべくわたし、当番じゃない日も来るようにするよ」

千里「え」
篤希「何かすごいかわいくなっちゃってさ、
　あの子たちが。毎日会いたい」
千里「うん、ありがと。わたしも自分の日じ
　ゃなくても、来れる日は世話しに来るから」
澪「だったら重点日は火曜だね」
しおり「うん、火曜日だ」
小春「……るっさいわ。ちゃんと世話しに来
　るわ」
しおり「ほんとかなあ。あんた未だに一匹も
　顔と名前一致できてないじゃん」
篤希「どの子も全然懐いてないしね。ヒメな
　んか小春が小屋に近寄るだけで隅に行って
　震えちゃう」
澪「やすべえなんか目吊り上げて歯もむき出
　しにしてたいへん」
小春「……」
しおり「やっぱり変更だ。火曜は誰でもいい
　から小春といっしょに世話することにしよ
　う。小春一人じゃ絶対無理」
篤希「賛成」
　ほっとした顔になる小春。
しおり「だからって世話しなくていいわけじ
　ゃないんだかんねっ！　火曜はちゃんと来
　るのよあんた！」
小春「へいへい」

８３同・校長室
　窓辺に立ち帰宅する生徒を見ている涼子。
　楽しげに話しながら帰る五人に気づく。
涼子「うわ」
　窓を開ける涼子。
涼子「おーい、あんたたちぃ、本庄さ～ん」
　涼子に気づく五人、足を止める。

８４同・校庭―校長室
しおり「校長だ」
小春「めっちゃ手ぇ振ってるやん」
　涼子ぶんぶんと手を振りつづけながら
涼子「何よぉ、あなたたち、えらく仲よさげに歩いてるじゃない。わたしも仲間にいれてよぉ。住吉さん、よかったやん。ええツレが四人もできましてまんねんなあ」
　校長をじっと見ている五人。
小春「関西人が一番嫌いなもんがアレや」
篤希「え」
小春「関東人のパッチもん関西弁。サブイボ出るわ」
しおり「校長先生ぇ」
涼子「何ぃ」
しおり「メジロパーマーって知ってますぅ」
涼子「え、メジロがどうしたって？」
しおり「メジロパーマー。知らない人は仲間に入れてあげませぇん」
涼子「知らなぁい。何それ、教えてよぉ」
しおり「教えませぇん」
涼子「意地悪ぅ」
しおり「それじゃあ――ふふ、行こ、みんな」

８５同・校長室
　涼子、帰っていく五人の後ろ姿を微笑んでじっと見つめて。
　椅子にすわる涼子。けげんそうな顔になり。
涼子「――メジロパーマー……いや、目白パーマって言ったの？　何、そんなパーマ屋さんがあるの？」

８６大谷ボクシングジム・外景（夕方）

８７同・二階フロア
由香のリードに従い、ＯＬたちに混じってボクササイズをする千里。軽快な音楽に乗ってパンチやキックをくりだす様はいかにも楽しそう。

８８同・一階フロア
ダンベルを手に持ち、必死の形相でパンチを出す練習をしている澪。リング上ではアリスが会長相手にキックバッグ打ちの練習をしている。

８９同・二階フロア
休憩時間。フロアの壁に背中をつけて座り汗を拭いている千里に由香が話しかけてくる。
由香「痩せたよねえ、手塚さん」
千里「あ、はい。始めて五キロ減りました。けっこう食べてるんですけど」
千里「あなたくらいの年頃はね、無理なダイエットは禁物なの。ちゃんと食べて、しっかり運動すればそうやって体重は自然と落ちていくの。実感できるでしょ」
千里「はい」
由香「これやり始めて肩こりや腰痛が良くなったＯＬさんもたくさんいるんだよ」
千里「へーえ」
千里の隣に腰を下ろす由香。
由香「手塚さん」
千里「はい」
由香「三日後ね、アリスちゃんの取材にテレビ局が来るんだ」
千里「ああ、前にみぃちゃんそんなこと言ってました。三日後ですか」
由香「うん。そのことで菅原さん今会長に呼

ばれてる」
千里「え」
由香「生中継の取材はアリスちゃんのサンドバッグ打ち、インタビュー、会長相手のミット打ちで終わる五分くらいのものらしいんだけどね」
千里「はい」
澪「テレビ中継終わった後、アリスちゃんと菅原さんのスパーを予定してるらしいの」
千里「スパーリングを中継終わった後に」
由香「そう。アリスちゃんみたいな、かわいい女の子のアスリートばっかり集めたドキュメント番組作るんだって。それにスパーの様子も入れたいんだってさ、テレビ局」
千里「そうなんですか」
由香「絵になるからね、同年代の女の子どうしのスパーリングなんて。このジムで何とかあの子と対等にやりあえるのなんて菅原さんだけだし」
千里「何とか、ですか」
由香「うん。入れ込んでんだよねぇ会長、アリスちゃんに。彼女が有名になればなるほど入門希望者増えるだろうし。商売上手いよ、ほんと」
千里「……」
由香「菅原さんがかわいそうでならないよ」
千里「どういうことですか、それ」
由香「ん？　そこから先は言わない方がいいかもね」
軽快な音楽が鳴る。立ち上がりリーダーの位置に戻る由香。ＯＬたちを前に指導を始める。壁際に座ったままでいる千里。

９０喫茶・アドラーブル（夜）

テーブル席に向いあって座っている千里と澪。澪の前にはバナナジュースとおからクッキー。千里はスパゲティを食べている。
澪「練習終わってすぐ炭水化物摂ると太るんだよ。家帰ってからもご飯食べるんでしょ」
千里「……だってすごくお腹すくんだもん。それに、太ってないし、逆に痩せてるし」
澪「うん、痩せたね。頬のラインがシャープになった。それに、変ったよ、千里」
千里「え」
澪「何か変わった」
千里「そうかな」
澪「うん」
千里「あのさ」
澪「うん」
千里「今日由香トレーナーから聞いたんだけど、三日後、あの子の取材にテレビ局が来るんだって」
澪「うん」
千里「会長さんに呼ばれたんでしょ。取材の後のスパーリングのことで」
澪「うん。よく知ってるね」
千里「受けるの？」
澪「――決まってる」
じっと澪を見つめていた千里、やおらスパゲティを猛烈な勢いで食べ出す。
唖然となりその様子を見ている澪。食べきってしまう千里。
千里「ふぅ、おいしかった――あの子が勝つの前提にしてるよね、テレビ局、それに会長さんも」
澪「――」
千里「ムカつくよね、そういうの」
澪「仕方ないよ」

千里「――勝ちたいね」
澪「うん、勝ちたい」
千里「勝ってね」
澪「ああ、今度こそ勝つよ」
千里「リング下から応援してるから」
澪「うん」
千里「そうだ、みんなも呼ぶよ」
澪「え」
千里「ダメ、かな」
澪「……やっぱり変わったよ、千里」

91大谷ボクシングジム・一階フロア(夕方、澪・スパーリング当日)
リング上で女性リポーターからインタビューを受けているアリス。澪、フロアの隅でシャドーボクシングをしながらその様子をじっと見ている。その横にいる千里。やがてリング上で始まるアリスの会長を相手にしてのミット打ち。千里、澪の側を離れジムの外へ。

92同・入口あたり
寄りそうようにして立ち、中の様子を見ているしおり、小春、篤希の三人。
千里彼女たちのところへ行く。
千里「もうすぐ始まる」
しおり「うん……」
動かない三人。
千里「どうしたの」
小春「いや、やっぱり圧倒されるっていうか」
篤希「だよね。なんか凄い迫力」
千里「みぃちゃんの応援してあげないの？
そこにそうやってずっといるつもり？」
ジムの中に入ってしまう千里。
小春「ここまで来て、引き返すわけにはいか

んし……しかし、あの子変わったな」
篤希「うん、変わった」
しおり「変わったんじゃなくて、知らなかっただけじゃないかな、あの子のこと――とりあえず、中入ろうよ」
身を寄せ合うようにしてジムの中に入って行く三人。

93同・一階フロア
澪のところへやってくる四人。
千里「みんな、来てくれたよ」
澪「――タイトルマッチみたいだね」
千里「そんな気持ちでいるんでしょ、みいちゃんだって」
澪「ああ。ぶっ倒してやる」
漂う澪の殺気に言葉を失っているしおり、小春、篤希。由香がそこへやって来る。リング上から大谷が澪を呼ぶ。
大谷「おーい、澪、準備いいか」
うなずく澪。ヘッドギアをつけてリングへ向かう。
しおり「あ、あの澪」
振り返る澪。
しおり「あの、わたしたち、こんなの見るの初めてで、正直ビビっちゃっててさ。なんていったらいいのか、その……」
小春「（小声で）何を言うてんねんあんたは。集中切れるやろ」
しおり「あ、ご、ごめん。あの、その、何だろう、と、とにかく頑張って」
じっとしおりを見つめていた澪。静かに頷き、またリングへと歩を進める。
千里「うん、みんな応援しよう。みいちゃん、勝とう、絶対勝とう！」
篤希「ファイト、澪！」

小春「澪いっけぇ！」
しおり「頑張れ、頑張って！」
　四人の声援に異様な雰囲気に包まれるジム内。
由香「しっかり距離取ってね、菅原さん」
　その声に振り向かず、ロープを跨いでリングに入る澪。リング中央、レフェリー役の大谷を挟んで対峙する澪とアリス。
アリス「たかがスパーにお友達の応援つき？」
澪「――」
アリス「引き立て役って言葉知ってる、あなた」
澪「――」
アリス「お父さんやお母さん泣かないかな、あなたが叩きのめされるのテレビで流れるって知ったら」
澪「そのよく動く口しばらく開けないようにしてやる」
　顔つきの変わるアリス。
大谷「ルールを確認しておく。三分二ラウンド。二回ノックダウンした時点で終了だ。分かっていると思うが前蹴り、ひざ蹴りは禁止。それからローブローには特に注意すること。それじゃ二人とも一旦コーナーに別れて、マウスピースをつけろ」
　コーナーに別れる二人。女性リポーターがマイク実況を始める。
リポーター「さあ、いよいよアリスちゃんのスパーリングが始まります。相手は同い年の女子選手。キャリアはアリスちゃんより上ということです。はたしてアリスちゃん、この勝負に勝つことができるでしょうか。がんばれ、キックの国のアリス！」
小春「やかましい！　勝つんは澪じゃ！　ア

リスちゃんアリスちゃんってうるさいんじゃ！　頭カチ割るぞ！」
　唖然となるリポーター。
しおり「……小春、あんたおっさんみたいだよ」
小春「あ～何か燃えてきたっ！　うちほんまはこんなんめっちゃ好きやねん！　いったれ澪！　シバキ倒せ！」
　リング中央、二人が拳を合わせる。ゴングが鳴る。
〈1ラウンド〉
　静かな立ち上がり。ジャブの応酬。
　最初のクリーンヒットパンチは澪。
　歓声を上げる四人。
　コーナーに押し込む澪。一気呵成に攻め込む。澪、優勢。だがアリスの上手い防御に手こずり倒しきることができない。終了間近、アリスのミドルキックが炸裂する。顔を歪める澪。ゴング。
　コーナーに戻る二人。
　四人、澪のコーナー下に駆け寄って。
千里「いいよ、みぃちゃん。押してる押してる。パンチキレてるよ」
澪「キック、重くなってる……」
千里「え」
　ゴング、コーナーを跳び出す澪。
〈2ラウンド〉
　激しい打ち合い、蹴りあい。徐々に澪を押し込んで行くアリス。攻勢に晒される澪。重いパンチ、蹴りに顔が歪む。少し距離をとるアリス。果敢に前に出る澪。コーナーに澪を追い込み、また激しい攻撃を繰り出すアリス。その様が何度も繰り返される。
千里「……いたぶってる」

篤希「え」
千里「いつでも倒せるのに、みぃちゃんの
　ことといたぶって喜んでる、あの子」
しおり「そんな、何で止めないの。止めな
　きゃそんなの。おかしいよ」
　　アリスの顔に浮ぶ笑み。
しおり「うそ……」
　　大きく距離をとったアリス。来い来
　いというように右拳で手招く。挑発
　に乗ってリング中央に出て行く澪。
　軽く左拳を上げるアリス。突っ込む
　澪。アリスの右カウンターパンチを
　顔面に食らい、ぐらつく。大きく体
　が傾ぐ。アリス、すぐさまハイキッ
　ク。澪の側頭部を捉える。前のめり
　に倒れる澪。起き上がることができ
　ない。連打されるゴング。リング中
　央、大きく拳を突き上げるアリス。
千里「みぃちゃん！」
　　うつ伏せになっていた澪。這いつくば
　り頷く。懸命に立ち上がろうとする澪。
澪「あ、ああ……」
　　ロープにもたれかかるようにして尻も
　ちをつく澪。失禁する。
千里「みぃちゃん！」
しおり「澪！――みんな、早く！」
　　リングに上がる四人。屈んで澪を取
　り囲み、周囲の視線から隠す。由香
　も上って来る。
澪「ああ、ああ……」
千里「うん、うん」
澪「止まらないよ……」
千里「いいんだって、かまわないんだって」
　　澪を強く抱きしめる千里。澪の顔を
　覗きこむ由香。

由香「菅原さん、ここがどこだか分かる？」
澪「……」
由香「分かったらちゃんと答えて」
澪「ジムの、リングの、上……」
由香「うん。あなた、今まで何してたの」
澪「アリスとスパーリング。でも、負けた……あ、ああ……」
由香「よし、意識はちゃんとしてるわね。体と心が極度の緊張から解放されたことによる失禁よ。心配することはないわ。大丈夫、ここで全部出しちゃっていい」
リング下でリポーターが絶叫する。
リポーター「やりました！　アリスちゃんが勝ちました！　カウンターパンチからのハイキックという見事な攻撃で圧倒的勝利！　やはりアリスちゃんは強かった！」
リングを降りる小春。
しおり「小春！」
リポーターのところへ行く小春。マイクを奪い取って床に叩きつける。
小春「おまえほんまに殺すぞ。おら、おまえもいつまで撮っとんねん」
カメラを押し下げる小春。
リング上、澪たちを見下ろしているアリス。
アリス「あらら。神聖なリングをおしっこで汚すなんて信じらんない」
アリスをにらみつける三人。
アリス「何、その顔。あなたたちもおもらしさせてあげよっか」
リングを降りるアリス。
しおり「あの、澪どうしたら」
由香「そうね、とりあえずここから降ろそう」
篤希「うん。じゃあほらわたしの背中におんぶさせてみんな」

澪「……背中、汚れる」
篤希「何言ってんの。わたしが一番タッパあるんだから、ほら早く」
篤希に背負われてリングを降りる澪。
千里、小春、由香も続く。茫然と立っている大谷のところへ行くしおり。
しおり「雑巾とバケツ、ありますか」
大谷「え、あ、あるけど」
しおり「出してください。わたし、リング掃除しますから――会長さん、気づいてましたよね、あのアリスって子が途中で笑ってたの」
大谷「――」
しおり「澪があの子に勝てないって、分かってやらせたんですよね――澪のこと曝しものにしたあなたのこと、わたし絶対に許さない」
鋭い目つきで大谷を睨みつけるしおり。
リング下から二人の様子を見ている由香。

94同・シャワールーム
裸でうずくまり、シャワーを浴びている澪。

95路上（夜）
歩く澪。十メートルほど後ろを固まって歩く四人。だれも澪に声をかけることができない。

96土手上の道
川音が聞こえる土手上の道。さっきまでの距離を保ったまま歩き続けている四人。立ち止まる澪。振り向かず。
澪「いつまでついてくるつもり」

四人、答えない。
澪「家まで、ちゃんと帰れるよ」
四人、顔を見交す。その後ろからスクーターがやって来る。由香である。澪の立っているところまで来て、止まる。
由香「気分悪いとかない、菅原さん」
澪「はい、大丈夫です。ご心配おかけしました」
二人の近くまでやってくる四人。
由香「そう、ならよかった。じゃあわたしなりの今日のスパーリングの感想を言うわ。負けて当然よあなた。今日のあなたじゃ百回やったってあの子に勝てない。スパー決まってからこっち、あなた寝てないんじゃない？」
澪「――はい」
由香「休んでない脳、ガチガチに緊張した体、そんなのでまともに戦えるわけない。それが敗因その一」
澪「――」
由香「敗因その二、戦い方の完全な間違い。スパーの前、わたしが距離を取って、って言ったの聞こえてた？」
澪「――聞こえてました」
由香「ああ、そうだったんだ。だったらどうしてあんなに接近戦を挑んだの」
澪「それは……」
由香「分かってるんでしょ、スピードとキレじゃ自分の方があの子より上だって。だったらなぜそれを生かす戦いをしないのよ。腹が立つくらい無様な負けっぷりだわ」
しおり「もう、もういいじゃないですか。そんなこと、今の澪に言わなくたっていいじゃないですか」
由香「今だから言っておかなくちゃいけない

の。いい、菅原さん。アリスちゃんはパンチも突進力もあなたより格段に強い生粋のインファイター。でもあなたは距離を取ってスピードで勝負するアウトボクサー。そんなあなたがあの子と同じ戦い方したって負けるにきまってるじゃない。キックボクシングはね、アウトボクサーの方がインファイターより有利な競技だとわたしは思っているの。蹴りを伸ばせる分だけね。なのにあなたはあまで叩きのめされた。インファイターにあんなきれいなハイキック決められた」

澪「……」

由香「今考えてるまま、やめるか、ん？」

うつむいたままの澪。

由香「おもらしさせられたまま、やめるんだ」

千里「やめてよっ！」

由香にくってかかる千里。

千里「だったら、だったらみぃちゃんにちゃんと教えなさいよ！　会長や他のエキスパートのトレーナーが指導してるの、あの子ばっかりじゃない！　みぃちゃんのミット打ちやキックバッグ打ちの時間なんか、あの子の半分どころか三分の一もないじゃない！　どうやって戦ったらいいか、どんな戦い方が合ってるのかどうか、ちゃんと教えるのもトレーナーの仕事じゃない！　それもしないでなに偉そうなことばっかり言ってるのよ！　偉そうなことばっかり、言わないでよ！」

うずくまり泣く千里。

由香「うん、そうだね。あなたの言うとおりだと思う。やっぱりエキスパートのトレーナーに気を遣っちゃたんだよね。女が何を講釈たれてんだ、何て思われるのも嫌だったしさ」

千里「そんなの、いいわけだよ……」
由香「うん。いいわけだ。せめてスパー決まってからの三日間だけでも指導してあげればよかったって、後悔してる。だからね、わたし今あのジムやめてきた」
　　驚く五人。
由香「声がかかってたんだよね、別のジムから。でも、今のボクササイズのトレーナーの方が待遇いいから、ずっと迷ってたんだけどさ。でも今日あなたが会長に言ってたの聞いたときに決めたんだ」
　　しおりを見る由香。
しおり「え？」
由香「選手を曝しものにするような会長のジムで、いつまでもトレーナーはできないわ」
小春「あんたそんなこと言うたん？」
しおり「……うん」
澪「トレーナー」
由香「ん？」
澪「トレーナーの言ったとおりに練習してたら、戦ったら、あの子に勝てますか」
由香「勝負ごとだから絶対はない。それにやっぱりアリスちゃんは強い。でも、今のままの練習環境でいるよりは、勝つ確率は圧倒的に高くなる。それは断言できるわ」
澪「実力がついたら、もう一回あの子とスパー組んでもらえますか」
　　頷く由香。
澪「もっと実力がついたら、アマチュアの大会に出させてもらえますか」
　　頷く由香。
澪「フォームから指導してもらえますか」
　　頷く由香。
澪「わたしも、トレーナーが行くジムに、行っていいですか」

頷く由香。
由香「悪い癖全部矯正して、しごくよ」
澪「はい、お願いします」
頭を下げる澪。
澪「しおり」
しおり「何」
澪「カメラ、持ってる？」
しおり「うん」
澪「フラッシュついてるんだよね、それ。撮って、わたし」
しおり「え」
澪「今日のわたし、残しておきたい」
しおり「うん、分かった」
澪を撮るしおり。しおり[写るんです]を由香に差し出す。
しおり「わたしたち、撮ってもらえますか」
頷く由香。澪を中心に集まる五人。
闇の中、突っ立ちカメラを見つめる澪をまん中に、五人が並んだストップショット。

97歩道橋の上（夕方）
手摺によりかかるようにして立っている、しおり、小春、千里、篤希。
小春「うち、歩道橋なんて昇ったの初めてかもしれん」
篤希「あ、それわたしも」
千里「ここから見るちぃちゃんが、いちばんきれいでかっこいいの」
しおり「あ、きた」
下の舗道を澪が走っていく。
篤希「ほんとだ」
千里「ね」
小春「いけてるわ、最高や」
しおり「澪！」

千里「みぃちゃん！」
小春「澪！」
篤希「澪！」
立ち止まる澪、歩道橋を見上げる。手をふる四人をじっと見つめる。拳を突き上げる。また走りだす。その後ろ姿をじっと見つめる四人。

９８××高校・校舎裏（午後）
ウサギ小屋の隣にベンチが出来ている。そこに座って競馬新聞を読んでいる篤希。両手を広げて立っている澪に軽くパンチを出す練習をしている千里。ウサギ小屋の前に座っているしおり。
しおり「まったく火曜日だってのに」
篤希「いいじゃないの。みんなこうして来てるんだから」
千里「そうだよ。誰かが来てるんだったらいいよ。小春ちゃんだってさ、自分の当番じゃない日に来てくれたこともあるんだもん」
しおり「けどさぁ」
小春がやってくる。
しおり「小春ぅ、あんた遅いよ。もうみんなで世話終わらせちゃったよ」
篤希の隣に座る小春。
小春「ごめん」
篤希「ん、どうした。元気ないねあんた」
小春「ん……」
澪「何かあったの」
小春「ん、何かあったと言えばあったって言うか……」
しおり「何ぃ。誰かにコクられたぁ？――なわけないか」
小春「……」
四人の視線が小春に集まる。

千里「うそ、マジでっ!?」
　首を横に振る小春。
篤希「じゃあ、どうしたのよ」
小春「今年入ってすぐ歌を録音してん、うち」
しおり「録音」
小春「うん。おとんのギターで歌てるのん」
篤希「何でまたあらたまって」
小春「常連のお客さんに川田さんって、知り合いの知り合いの知り合いにレコード会社に勤めてる人がいる、いうお客さんがおってな」
澪「知り合いの知り合いの知り合い」
小春「うん。で、その川田さんがうちの歌、レコード会社の人に聞かせたるいうから、録音して渡したんよ」
しおり「初耳だよ、そんなの」
小春「そこから先があるなんか思わへんもん。だから言わへんかった。酔っ払いの約束なんて九割あてにならんって、オトンも言うてたし。それに知り合いの知り合いの知り合いやで、つきあいないのもいっしょやん。わたしも、そんなこと忘れてたくらいやってん」
千里「あったの、その先が」
　うなずく小春。
小春「さっき、家出よかって思ってたら、その川田さんの知り合いの知り合いの知り合いっていう、レコード会社の渉外担当マネージャーって男の人と、サブプロデューサーとかいう女の人がうち来てな」
しおり「う、うん」
小春「テープ聞いたディレクターがうちの歌、実際に聞きたいって言うてるから、明後日会社の隣にあるレッスン場に来てくれって」
澪「マジ?」

千里「マジで？」
小春「うん」
しおり「うわぁっ、スゴイじゃんか小春っ！」
小春「いや、ただ歌聞きたいって言われただけやしさ」
澪「何言ってんの、小春の歌が凄かったから、そのディレクターも生で聞きたいって思ったんでしょ、きっと」
千里「そうだよ。小春ちゃんの歌、生で聞いたらその人も絶対驚くよ！」
篤希「すごいよ小春！」
しおり「ねぇ、ひょっとして、そのままデビューなんてこともあったりさぁ」
千里「うわぁ、すごい！」
澪「あるね、小春の歌ならそれはある」
篤希「小春、デビュー決まったらサインちょうだいよ。有名歌手のデビュー前のサインって価値あるんだから」
しおり「ちゃっかりしてるわ」
　小春の前で盛り上がる四人。
小春「デビューとか、そんなん気が早すぎるわ」
しおり「何ぃ、えらくしおらしいじゃない。人の事になるとグイグイ前に出て来るあんたがさぁ」
澪「そうだよ。喜びなよ、小春」
小春「うん――」
篤希「何ぃ。もうじれったいなぁ」
小春「いや、今の今やからさぁ、どう思ってええのかわからへんのよ、実際。それに、明後日上手いこと歌えへんかったら何の意味もないし」
しおり「たしかに明後日は人生左右する大勝負だね」
小春「そやから、あんな……」

篤希「ん？」
小春「明後日な……いや、やっぱりエエわ」
千里「もう何よ。ちゃんと言ってよ小春ちゃん」
小春「うん、そやから明後日みんなに……いや、やめとく……」
しおり「ちゃんと言え、小春」
小春「え」
しおり「ちゃ～んとみんなにお願いしな」
篤希「そうだよねぇ。天才演歌歌手の卵さん、明後日わたしたちにどうしてほしいのかなぁ」
小春、ベンチから立ち上がって。
小春「あ～もう、分かったわ！　明後日、一人でレッスン場まで行くのは不安です！　みなさんついて来てください、お願いします！」
しおり「はい、たいへんよくできました！」
四人の笑顔が小春の周りで弾ける。

９９ファミリーレストラン（午後、小春歌披露当日）
テーブル席に座っているしおり、千里、澪、篤希。
千里「小春ちゃん、何時にレッスン場入ったんだっけ」
しおり「二時。最初三時の予定だったんだけど、杉本とかいうサブ何とかって女の人から連絡があって一時間早まったって」
澪「四時前か――だいぶ経つね」
篤希「聞き惚れて何曲も歌わされてるんじゃないの」
しおり「あり得る、それ」
千里「ねえ、冗談じゃなくさ、歌手デビューってあるよね、小春ちゃん」

澪「うん。あるよ」
千里「そうなったらさ、やめちゃうのかな、学校」
しおり「小春が学校、やめる……」
千里「だって、難しいっていうよ、芸能活動と学校の両立って」
篤希「確かに。堀越学園ならいざ知らず」
澪「あの子なら思い切って決断下すかもね」
しおり「……」
千里「あ！」
入って来る小春。四人のいる席に座る。
しおり「どうだった？」
小春「ん、うん」
しおり「うんじゃないよ、どうだったって」
小春「うん。あかんかった。ダメやった」
しおり「ダメって……どういうことよ」
小春「うん」
黙り込む小春。
澪「説明して、小春。ちゃんと聞く責任がある、わたしたち」
篤希「うまく、歌えなかったの？」
小春「……杉本さん、全然ダメやって。デビューなんて夢のまた夢やって」
しおり「杉本――ちょっと待って、それってサブ何とかって女の人でしょ。何でその人が判断するのよ。あんた今日はディレクターに歌聞いてもらうはずだったじゃない」
小春「うん。わたしもそのつもりでいてんけど」

１００レコード会社・レッスン場（小春の回想）
レッスン場で待っている小春。入ってくる杉本（34）。
杉本「住吉小春さんね」

小春「はい」
杉本「今日あなたの歌を聞く予定だったディレクターの遠藤は急用のためここに来れなくなりました」
小春「急用……」
杉本「はい。ですので後ほどわたしがあなたの歌を聞かせていただきます。よろしいですね」
小春「……」
杉本「何、不満そうね」
小春「いえ、そんな」
杉本「こんなのこの業界ではよくあることよ。遠藤急用の場合の責任者はわたしです。ここでしばらく待っててください。それじゃ」
出て行く杉本。立ちつくす小春。
しおり（声）「何、それで一人で待たされたの」
小春（声）「うん」
澪（声）「その杉本ってのが戻って来たのいつ」
小春（声）「三時半少し前」
篤希（声）「さっきじゃない！　何、じゃああなた一時間半近くひとりで待たされたっていうの？」
小春（声）「うん」
しおり（声）「……それから」
小春「え」
しおり（声）「杉本が戻って来てからどうなったのよ」
小春（声）「うん……」
×　×　×
アカペラで『みちづれ』を歌い終える小春。壁に背をもたせかけ、それを聞いていた杉本。
杉本「ダメね」

小春「え」
杉本「確かにテープじゃ聞かせるものがあったけど、こうして実際に生歌聞いてみると全然ダメ。こぶし回しもいやらしいし、変な癖もたくさんついてる。高二なのに若々しさのかけらもない」
小春「……」
杉本「これきっかけに歌手デビューなんて甘いこと考えてたんでしょ、あなた。残念ながらそんなの夢のまた夢よ。はい、お引き取りいただいてけっこうです。遠藤にはわたしからちゃんと言っておきます」
レッスン場のドアを開ける杉本。
小春「あ、あの……」
杉本「何。二度目はないわ。こういうのはね、最初のチャンスを逃すと次はもう巡ってこないのよ。覚えておきなさい」

101ファミリーレストラン
しおり「それで、ここに戻ってきたわけ」
小春「……」
立ち上がるしおり。千里、澪、篤希も次々と。店を出て行こうとする四人。
しおり「アツ、とりあえずみんなの分払っといて。あとで清算するから」
篤希「分かった」
小春「ちょ、ちょっとどこ行くくん、みんな」
四人の後を追いかけるように小春。

102同・駐車場
大股で駐車場をつっきっていく四人。
小春「待って、ちょっと待ってって。なあ、どこ行くんよ、みんな」
しおり「決まってんでしょ。レコード会社よ」
小春「何しによ。エエよ、もうエエって」

篤希「いいわけないでしょ」
小春「わたしの歌がアカンかってん。杉本さんにそう判断されてんから仕方ないんや。もうエエってみんな」
立ち止まる四人。
しおり「ふざけないでっ！」
澪「何で約束違うってその杉本につかみかからなかったのよ」
千里「そうだよ。ディレクターの遠藤って人に聞いてもらうのが約束だったんでしょ。急用ができたからわたしが聞きます。ダメでした帰ってくださいなんて何それ。信じられない」
篤希「一番信じられないのはあんたよ、小春。何そのまま帰ってきてんの。人のことにはあれだけ感情むき出しにするくせに、自分のことになったらそんなに弱気になるわけ？」
小春「……」
篤希「今のあなた、だいっきらい。」
しおり「行くよ」
歩き出す四人。
小春「待って、待ってぇなぁ」

１０３レコード会社ビル入口
ずかずか入っていく四人。後から小春も。

１０４同・受付
しおり「サブ何とかの杉本さん、レッスン場から戻ってらっしゃるでしょうか」
受付嬢・小鳥遊（２７）「あ、あのアポイントメントは」
しおり「あ、あぽ、何？」
篤希「アポイントメント。約束のこと」

しおり「ああ約束ね。ええ、してましたよ。
最初はね、今日の三時にレッスン場で。そ
れがそっちの都合で二時に変更になって、
ディレクターの遠藤に急用ができたから杉
本が出て来て、待たせるだけ待たして三時
半に歌わされて、ダメでした二度目のチャ
ンスはありませんって、どこの世界にそん
な話しがあるのよっ！」
千里「何様なんです、あなたたち。レコード
会社の人間ってそんなに偉いんですか（小
鳥遊の身分証を見て）えっと……こちょう
ゆう、さん？」
小鳥遊「たかなし、です。あの……遠藤なら
現在出社しておりますが」
小春「え」
しおり「いるのっ、遠藤？」
小鳥遊「はい。アポイントメントをとられて
いるならお呼びしますが……あ、丁度降り
て来たようです」
エレベーターのドアが開き、ディレク
ターの遠藤（50）が出て来る。駆け寄
る四人。
遠藤「お、おお、何、君たち」
しおり「ディレクターの遠藤さんですね」
遠藤「ああ、そうだけど」
しおり、振り向いて。
しおり「ほら、小春。遠藤さんいたよ。早く
こっち来て」
おずおずと歩き、遠藤の前に立つ小春。
小春「あの、は、初めまして。住吉小春です」
遠藤「ああ、テープの。急用できて今日キャ
ンセルするって杉本から聞いたけど」
小春「え」
しおり「遠藤さんの方こそ急用ができて、今
日だめになったんじゃなかったんですか」

遠藤「いいや。誰が言ったのそんなこと」
小春「杉本さんが。そやからわたし、杉本さんに歌聞いてもらって。それでダメだって言われて」
遠藤「杉本がぁ？――あたたたたっ。やりやがったな、あいつ。ごめん、住吉さん、本当にごめん。悪いのは全部こっちだ」
両手を合わせ頭を下げる遠藤。
しおり「じゃあ、小春の歌、今から聞いてもらえますか」
遠藤「もちろんだよ。俺、楽しみにしてたんだから。住吉さんの歌、生で聞くの」
湧く四人。
小春「お願いしますっ！」
遠藤「よし、じゃあレッスン場行こうか」
小春「はい！」
遠藤「お友達は、ロビーでお茶でも飲んで待っててくれるかな」
しおり「はい。小春、頑張って」
澪「しっかり」
千里「いつもどおりね」
篤希「びっくりさせてきな、小春」
うなずく小春。
遠藤「（小鳥遊に）コトリちゃん、彼女たちにピザでもとってあげて」
小鳥遊「はい」
歩き出す小春と遠藤。入口自動扉が開き杉本が戻ってくる。二人に気づき立ち止まる杉本。その前を過ぎる小春と遠藤。
遠藤「杉本」
杉本「……はい」
遠藤「あとで話しがある」
出て行く遠藤と小春。立ちつくす杉本のところへ小鳥遊がやってくる。

小鳥遊「杉本さん、あの子たちと会われたこ
とはありませんよね」
杉本「あの子たち？」
小鳥遊「今あそこではしゃいでる女の子たち
です」
杉本「ないけど、それが」
小鳥遊「よかった。あ、首から下げてる身分
証、外してあの子たちの前通った方がいい
ですよ。あなたが杉本だって分かったら、
あの子たちに何されるか分かりませんから」
一歩踏み出す小鳥遊、振り返り。
小鳥遊「杉本さん。レコード会社の人間って、
そんなに偉いんですか」
受付に戻る小鳥遊。立ちつくしたまま
でいる杉本。

１０５レッスン場
内藤（40）のピアノ伴奏に合わせて
発声練習をしている小春。椅子に座っ
てその様子を見ている遠藤。
遠藤「ピアノに合わせて声出すの初めて？
住吉さん」
小春「あ、はい――下手でしょうか」
内藤「ほらぁ、遠藤さん。委縮させちゃダメ
でしょうよ」
遠藤「ゴメンゴメン。初々しくっていいなっ
て思ってさあ。やっぱりいい声してるわ。
じゃあ、そろそろいける？」
小春「はい」
遠藤「その前に――杉本の事、許してやって
くれな」
小春「――」
遠藤「あいつも演歌歌手やってたんだよ、十
九の頃から。でも泣かず飛ばずでね。ドサ
も一生懸命やってたんだけどな。結局芽が

出なかったんだよ。で、去年の暮れに見切りつけさせてね。今の仕事やってるんだけど。まだどうも割り切れてないみたいでさ」
内藤「ジェラシー感じちゃったんだろうねえ、テープで君の歌聞いた時に。あ、ちなみにこの人は元フォークバンドのボーカル。ヒットは一曲もなし！」
遠藤「うるせぇよ。とにかく杉本にはきつく言っておくから」
小春「いいです。もう気にしてないです」
遠藤「うん、ありがとう。じゃあ行こうか。何歌う住吉さん。こいつたいがいの演歌なら伴奏できるよ」
小春「『みちづれ』――いえ、西川峰子さんの『あなたにあげる』をお願いします」
ヒューイ、と口笛を吹く遠藤。
遠藤「いけるよね、内藤ちゃん」
内藤「俺を誰だと思ってんのよ（前奏を奏ではじめる内藤）キーこれでいいかな」
小春「はい、お願いします」
歌い始める小春。
歌いきる小春。
内藤「遠藤さぁん」
手招きをする内藤。
遠藤「ん」
立ち上がらず椅子をガタガタさせながら内藤の側まで行く遠藤。顔を寄せ合う二人、小声で。
内藤「二番のサビのところでさ」
遠藤「うん」
内藤「勃っちゃった、俺」
遠藤「遅いよおまえ。俺は二番のAメロのところで勃っちゃったよ。だからよ、勃っちゃってるから立てねぇの」
小春「あの――」

小春を見る二人。
小春「どうだったでしょうか、わたしの歌」
小春をみつめニヤっと笑う二人。

１０６レコード会社・一階ロビー
戻ってくる小春と遠藤。駆け寄る四人。
しおり「どうだった、小春」
小春「うん」
千里「うん、じゃないよ。あの、遠藤さん、小春の歌、ちゃんと聞いてもらえました？」
遠藤「ああ。ちゃんと聞いたよ」
しおり「どうでしたか」
遠藤「後悔してる」
しおり「え――」
遠藤「録音しときゃよかったって思ってさ。お宝音源になったはずだから」
しおり「じゃあ」
小春「――デビュー前提に、これから週に一回、無料でレッスン受けさせてもらえることになった」
喜びを爆発させる四人。照れくさそうな小春。小鳥遊が立って小さく拍手をする。

１０７舗道
レコード会社から出て来た五人。舗道を歩いていく。タタッと四人の数歩前まで行くしおり。
四人「？」
しおり、振り返って頭を下げ。
しおり「『あの、は、初めまして。住吉小春です』」
爆笑する千里、澪、篤希。
小春「あんたなぁ……」
しおり「いやぁ、いいもの見せてもらった。

今日一番の収穫だね、あれが」
澪「確かに」
篤希「今日はザ・らしくない小春、の連発だったね」
小春「……」
千里「もう、かわいそうだよぉ。でも、よかった。本当によかった小春ちゃん」
小春「うん……」
篤希「デビュー前提にってさ、それいつくらいのことになりそうなの」
小春「高校卒業を目途にしようかって、遠藤さんが。うちもレッスンちゃんと受けたいし。それに学校と歌の両立は、やっぱり自信ない」
しおり「よかった」
小春「え」
篤希「ふふ。しおり心配してたんだよ。小春即デビュー決まって学校辞めちゃうんじゃないかって」
小春「そっか」
しおり「べつに心配なんかしてないけどさ」
篤希「あらぁ、さようでございましたか」
しおり「ええ、さようでございますわよ、おほほほほ」
また歩き出す四人。小春だけ立ち止まったまま。四人振り返り。
しおり「どした、小春」
小春「……ありがとうな」
しおり「え」
小春「今日、あんたらついて来てくれてへんかったら、うち、うち……」
泣き出す小春。その場にうずくまる。
小春をじっと見つめる四人。しおり「写るんです」を取り出す。
しおり「ほらぁ、未来のレコード大賞歌手、

こっち向け！」
屈んだまま顔を上げる小春。
しおり「何そのブサイクな顔！　笑え小春！」
シャッター音。泣き笑いの小春のストップショット。

１０８××高校・校舎裏（午後）
ひとりでウサギの世話をしている千里。
工藤がやってくる。
工藤「珍しいね、今日はひとり？」
千里「あ、はい。お盆でみんなおばあちゃんちとか行ったりしてて」
工藤「そう、千里ちゃんは」
千里「あ、うちは親戚が集まって来る方だから」
工藤「そうか。いい仲間ができてよかったな」
千里「――はい」
工藤「卒業したらさ、どうするつもり、こいつら」
千里「え」
工藤「まだちょっと先の話しだけどさ。でも千里ちゃんやみんな卒業した後面倒みる人間いなくなっちゃうからな。俺も来年定年だし」
千里「――」
工藤「今からちゃんと考えといた方がいいな」
千里「はい」
じっと小屋の中のウサギをみつめる千里。

１０９路上（夕方）
歩いている篤希。

１１０たんぽぽ、入口
暖簾が出ている。立ち止まる篤希。躊

躇っているが、おずおずと引き戸を開ける。
篤希「あの、こんばんは」

１１１同・中

カウンター内にいる幸世。奥のテーブル席に座ってギターをつま弾いている正敏。客はいない。
幸世「はい――あら」
篤希「あの、小春――住吉さん、おられますか」
幸世「あの子ね、今日初レッスンとかで出かけちゃってるのよ」
篤希「あ、そうなんですか」
幸世「小春ちゃんに会いにきてくれたの？」
篤希「そうなんですけど――でも、いいです。失礼します」
幸世「待って。どうぞ中入って」
篤希「いいです。そんな、たいしたことじゃないですから」
幸世「いいから。あの子ももうすぐ帰ってくると思うわ。どうぞ中で待ってて」
篤希「すみません。じゃあ失礼します」

店内に入る篤希。カウンター席に座る。麦茶を差し出す幸世。

幸世「毎日暑いわね」
篤希「はい」
正敏「黒田さん、やったね」
篤希「はい」

立ち上がり頭を下げる正敏。

正敏「この度は小春がえらいお世話になったみたいで。おおきに、ありがとうございました」
篤希「あ、そんな、わたしは何も」
幸世「小春ちゃんから話しは聞きました。み

んながいなかったらチャンス掴めなかったって、帰ってくるなりここで大泣きしたのよ」
篤希「帰ってからも泣いたんですか小春？」
幸世「帰る前にも泣いてたのあの子？」
　　顔を見合わせ笑う二人。
幸世「でもねぇ、いざそんなことになっちゃうと複雑なのよねぇ」
小春「芸能人になるんですもんね、小春」
幸世「ハァ……全然安定したお仕事じゃないし、悪い奴とか騙す奴とか、いっぱいいるんじゃないかってねぇ」
正敏「考えすぎやおまえは」
幸世「あなたが楽観的すぎるんです！　本当にこれでよかったのかしら。お店で歌わせたりしないほうがよかったんじゃないかしら」
正敏「そんな心配してもしゃあないやろ」
幸世「あの子は大事なわたしの娘です、心配するのは当たり前でしょ！　それにこれから先あの子に何かあったら、わたし道枝さんに顔向けできないわ」
正敏「出た。黒田さん、前にも言うてたやろ、これこいつの十八番。わしも小春も耳にタコ」
幸世「茶化さないで！」
　　笑う篤希。寂しげに俯く。
幸世「黒田さん？」
篤希「……父から」
幸世「お父さん――ああ、前に言ってた予想屋さんの」
篤希「はい。今日、父から封筒が届いたんです」
幸世「封筒――何かお手紙が入ってたの」
篤希「いえ。離婚届です」

幸世「――」
篤希「父が出ていってしばらくして住所が分かった時に、母が判子をついて送り届けてたんです。ずっとそのままだったんだけど、今日、父が名前書いて判子ついた離婚届が届きました」
幸世「で、お母さんは？」
篤希「それを持ってすぐ役所に行きました」
幸世「――そう」
うつむく篤希をじっと見つめる幸世。
正敏「幸世」
幸世「何」
正敏「ワシらもいろいろあった思てたけど、無駄に年だけくって生きてきたんやなあ」
幸世「え」
正敏「そやろが。今この子にかけてやる言葉、何ひとつ持ってへん」
幸世「――そうね」
正敏「小春に会いに来てくれたんやね、黒田さん」
篤希「はい。あの、小春の顔見て、関西弁聞きたくなって――それに何だかこのお店に来たくなったんです」
幸世「ありがとう」
正敏「おおきにな――おい幸世、ご飯作ったり」
幸世「はい」
篤希「え、いいです、いいですそんな。小春もいつ帰ってくるか分からないし、わたしもうこれで」
正敏「ほんまにこっちの子ぉは遠慮しぃやなあ。黒田さん、家帰ってもお母ちゃんの作った晩ご飯食べる気分やないやろ今日は」
篤希「……はい」
正敏「それやったらここで食べて帰ったらえ

え」
幸世「そうよ。おいしいの作ってあげるから
ちょっと待っててね」
篤希「しおりから何度も聞いてます」
幸世「え、何を」
篤希「小春のお母さんの料理、すごくおいし
いって。だからほんとは、わたしも食べて
みたいってずっと思ってて」
幸世「あらぁ嬉しい。お刺身は食べられる？」
篤希「大好きです。でも家じゃあんまり食べ
られない」
幸世「今日はカンパチのいいのが入ったの」
篤希「カンパチ――食べたことないです」
正敏「高級魚や、旨いでぇ。おい、天ぷらも
なんなと揚げたれよ」
幸世「分かってます。黒田さん、おかわりた
くさんしてね」
正敏「そや、こういう時こそおかわりや」
笑って頷く篤希。調理を始める幸世を
じっと見つめる篤希。ギターをポロン
と鳴らす正敏。
幸世「それにしても遅いわねぇ、小春ちゃん」
篤希「初レッスンだから、きっと教える方も
力が入ってるんだと思います」
正敏「なぁ、競馬で喩えたら何ていうのや今
日の小春は」
篤希「う～ん……調教初日、かな」
正敏「調教初日か、そらエエな」
入口引き戸が開く。入って来る小春。
小春「たらいま～……ってアツ、何あんた！？」
篤希「小春のオカンの料理、食べに来た」
小春「何やそれ？」
正敏「幸世ぉ、祝杯や冷で一杯くれ」
小春「何の祝杯や、まだ八時来てへん！」
正敏「決まっとる。おまえの調教初日のやな

いか」
小春「意味分からんこと言いな！」
正敏「ほな黒田さん来店記念の祝杯」
小春「何でもかんでも祝杯にして早から飲んでんのとちゃうわ、アホ！」
笑う篤希。その顔に浮ぶ寂しげな影。

１１２校舎裏（夕方、夏休み最終日）
ウサギ小屋の前で固まって立っている五人。千里を四人が取り囲むようにして。
しおり「千里、あんたそれ本気で言ってるの」
千里「うん」
篤希「どうして。みんなでこうやって世話しはじめて、どの子も懐いてくれたのに」
小春「うちのところにもやっと近寄ってくれるようになってんで」
千里「うん。みんなには本当に感謝してる。一人ずっとこの子たち世話するの、たいへんだったしみんなのおかげで本当に助かった」
しおり「だったら」
千里「この子たちの世話、いつまでもできない」
四人「――」
千里「卒業したら、この子たちの世話する人、誰もいなくなる」
小春「卒業って、まだ一年以上先の話しやん」
澪「あんただって、一年以上先を見てるでしょ小春。千里だって同じだよ」
小春「それは……」
澪「中学のときから一人でずっとこの子たち世話し続けてきた千里が決めたことだよ。わたしたちが何か言う権利なんてない」
千里「みぃちゃん、ありがとう。本音言うと

さ、もう抜け出したくなったの、わたし。
この子たちの世話する自分から――でも、
面倒くさくなったとか、可愛くなくなった
からじゃないことだけは、みんなに――」
しおり「バカ。分かりきったこと断らなくて
いいよ」
千里「――うん」
篤希「でさ、それでいいとして、実際これか
らどうするのこの子たち。引き取ってくれ
るあてはあるの千里」
千里「考えてることがある。校長先生に力に
なってもらおうと思って」
しおり「校長に？」
千里「うん。明日始業式終わったらカメラ持
っていく約束だったよね」
しおり「そうだけど。あんたよく覚えてたね
それ」
千里「そのときにちょっと頼んでみるよ」
小春「校長か――うちも頼みごとあんねん」
篤希「ちょっとあんた、マジであのこと……」
小春「そうや」
篤希「やめてよ。無理に決まってるじゃない。
それにもういいよ別に」
小春「無理かどうか頼んでみな分かるかいな。
それにエエことない。エエことないんやろ
アツ、このままで」
篤希「……」
しおり「ちょっと、さっきから二人で何のこ
と話してるのよ」
小春「今から話す。エエなアツ」
頷く篤希。
小春「千里も校長に何を頼むのか教えてくれ
るか」
千里「うん」

１１３××高校・校長室（放課後、始業式当日）
座っている涼子。その前に並んで立っている五人。デスクの上には「写るんです」が四つ置いてある。
涼子「渡したのは一つだったのに、四つになって戻ってきた」
しおり「五つめ、わたしが持ってます。全部レシートちゃんと取ってありますから、後で支払ってくださいね」
涼子「わたしがぁ？」
しおり「当たり前です。ミッションの発案者は校長先生なんですから」
涼子「ふふ。はい。分かりました」
しおり「で、どうなんですか。千里とアツの件」
涼子「そうね。ウサちゃんの件は手塚さんの考えてる形でいいと思うわ。まずわたしがあちらの校長先生にコンタクトとってみます」
千里「ありがとうございます」
涼子「いい返事がもらえたら教えます。でもそこから先はあなたたち、特に手塚さんの交渉しだいよ、いいわね」
千里「はい」
澪「よかったね、千里」
千里「うん」
しおり「で、アツの件は」
涼子「う～ん、そっちはねぇ」
しおり「ダメですか」
涼子「大井競馬場かぁ」
しおり「ダメですよね。じゃあ他当たってみます」
涼子「ちょっと待ってよ、今考えてるんだから」

しおり「小春、やっぱりダメだ。校長先生に
も立場ってものがあるんだからさ」
小春「そやな。頼ろうとしたうちが間違って
たわ」
しおり「いくら賭けないからって、校長が競
馬場に生徒連れて行ったなんて分かったら
大問題になるよ」
小春「そやな。いいだしっぺの人がちゃんと
おしり拭かなアカン思うたから校長先生に
頼もって思ったんやけどなあ」
しおり「バカだねえ。下手すりゃクビだよ。
チョーカイメンショクってやつだよ。そん
なのできっこないよ、ねえ校長先生」
涼子「……」
しおり「友達になりたい、なんつってさあ、
立場が違うんだもん。そんなの無理に決ま
ってんじゃん、ねえ校長先生」
涼子「……挑発してるんだよね、本庄さん。
今、わたしのこと」
しおり「あれ、分かっちゃいましたぁ？」
涼子「カッチーン」
五人「？」
涼子「頭にきた音」
五人を見つめ不敵に笑う涼子。

１１４△△小学校・体育館（放課後）
一年生から六年生まで五十人ほどが集
まって座っている。その前に立ってい
る千里。後ろに並んで立っている四人。
小学校の校長、教諭と並んで涼子も。
しおり「千里、大丈夫かな」
澪「全然心配ないよ」
篤希「言いきる？」
澪「この前軽くスパーのまねごとしたの、あ
の子と」

小春「ああ、千里もジム移ってんな」
澪「うん。わたしはパンチもキックもなしでフットワークでかわすだけだったんだけど」
しおり「それで」
澪「もの凄い勢いで向かってきた。最後、反射的にパンチ出して倒しちゃった。あの子の方がわたしより闘争心上だって言われたよトレーナーに」
しおり「ほえぇ」
澪「いちばん根性座ってるのがあの子だよ。だから大丈夫」

その場に座り、小学生と同じ目線で話し始める千里。

千里「みなさん、こんにちは。今日は集まってくれてありがとう。ウサギを飼いたいと思ってくれる人がこんなにいてくれて、わたしはとっても嬉しいです。でも、今からわたしの話しを聞いて、それでもウサギを飼いたいと思う人だけここに残ってください。いいですね——みなさんが飼いたいと思っているウサギは生き物です。だからおしっこもするし、うんこもします。世話をすることは、ただ餌をやったり水を換えたりするだけじゃありません。おしっこやうんこの掃除をしなくてはいけません。小屋をきれいにしてあげないとウサギは病気になってしまいます。中学生のとき、わたしは風邪で二日学校を休みました。その間ウサギたちの世話をすることができませんでした。風邪が治って学校に行くと、今日ここに連れて来ている六匹とも元気でいてくれました。けれど一匹のウサギは死んでいました。ヒトミといういちばんわたしに懐いてくれていた、いちばん体の弱かった女の子でした。わたしはあのときのヒトミの

体の冷たさを一生忘れません。わたしにとってはたった二日でも、ヒトミにとってはとても長い長い二日だったんです。きっとヒトミはわたしが来るのを待ちながら死んでいったんです。わたしが風邪をひいていなければ、ヒトミは死んでいませんでした。ウサギたちには夏休みも冬休みもありません。お正月もお盆もありません。毎日誰かが世話をしてあげなければ、ちゃんと餌をあげてうんこの後かたずけやおしっこの掃除をしてあげなければ、病気になったり、ヒトミのように死んでしまいます。ウサギは喋ることができません。だから様子をよく観察して、いつもと様子が違ったら、お医者さんに連れていかなくてはいけません。もしかしたらわたしが風邪にかかる前からヒトミは様子がおかしかったかもしれない。それに気づいていたら、わたしはヒトミをお医者さんへ連れていっていました。そうしたらヒトミは死なずに済んでいました。ヒトミを殺したのはわたしです——だから、ちゃんと世話をする自信のある人だけ残ってください。日曜日も、お正月も、当番の日は餌をあげにきて、そうじやうんこの世話をきちんと責任もってできる、という人だけ残ってください」

沈黙。考え込んでいる小学生たち。

小春「知らんかったな」

しおり「ヒトミの話し？」

小春「うん。澪は」

澪「初めて聞いた」

篤希「あの子、そんな気持ち抱えてたんだね」

涼子「——」

やがて一人抜け、二人抜け、その場から次々と去っていく小学生たち。閑散

となる体育館。五人の小学生が残る。
千里「ありがとう。わたしのところへ来てください――みんなお願い」
ウサギの入った大きめのダンボール箱を運んでくる四人。
千里「抱いてみる？」
いちばん小さな女の子と男の子に訊く千里。頷く二人。
しおり「大丈夫？」
千里「まる吉とノッコなら大丈夫」
二人にウサギを抱かせる千里。
千里「温かいでしょ」
うなずく二人。
女の子「おねえちゃん」
千里「何」
女の子「ちゃんと世話するね。おしっこの掃除もうんこの片付けも、風邪ひいててもちゃんとしにくるね、わたし」
千里「ありがとう。でもあなたが風邪をひいたときは無理しなくていいの。他の人や先生がかわりにちゃんとしてくれるからね」
男の子「うん。そのときはぼくがかわる。ぼくは絶対風邪ひかないようにする」
笑いがはじける。涼子が近寄ってくる。
涼子「手塚さん」
千里「はい」
涼子「とても立派だったわ。あなたのことを誇りに思います」
千里「――」
涼子「あなたはヒトミを殺してなんかない。もう自分のことを許してあげて」
千里を引き寄せ抱きしめる涼子。
涼子「温かいでしょ」
千里「――はい」
二人の様子をじっと見ている四人。

千里を離して涼子。
涼子「さぁて、次はあなたの番ね黒田さん――じゃなかった、白川さんになったのよね。いつにしようか」
篤希「あの、校長先生、本当に……」
涼子「あそこまでケンカ売られて黙って引き下がっていられますか」
篤希「あの、先生。ご存じないでしょうから言いますけど、大井競馬って中央と違って平日開催なんです」
涼子「へえ、そうなの。で、それが？」
篤希「いや、ですから平日だから学校が……」
涼子「そんなものズル休みすればいいだけのことじゃない」
篤希「ズル休み――」
涼子「健全な女子高生がズル休みの一回くらいしなくてどうすんのよ。競馬場の中じゃ離れずいるようにしましょう――平日開催かぁ。じゃあもう明日にしようか」
篤希「明日」
涼子「心の準備がいる？」
篤希「いえ。明日、お願いします」
涼子「分かった。これでいい、住吉さん」
気押されたように頷く小春。
大事そうに代わる代わるウサギを抱いていく小学生たち。

115××高校・体育館（朝）
全校朝礼。教頭の横山が演台の前に立っている。
横山「え～、本日は校長先生急病でお休みのため、わたくしがみんなにお話しをいたします。今日、この機会にわたしはみんなに少し苦言を呈したい。四月以降、服装、頭髪の乱れに象徴されるように、校内の風紀

が乱れていると思われてならない。今一度前井上校長が置きみやげとされた規律・鍛錬・純朴という校訓を思い出してほしい……」

身を屈め後ろからしおりのところにやってくる小春。

しおり「小春」

小春「ほんまにやりよったあの校長」

しおり「アツは？」

小春「来てへん」

しおり「そうか――行ったんだね競馬場」

小春「なあ、ばれたらほんまにチョーカイメンショクになるやろか、あの校長」

しおり「それは……まあ、問題にはなるだろうね」

小春「今更やけど――」

しおり「うん。責任感じるよね。でもきっと大丈夫だよ、バレないよ絶対」

小春「それやったらエエけどさあ」

教諭「こらぁ、何喋っとるんだそこ！　住吉、おまえ何でそんなところにいるんだ！」

小春「うっさいんじゃ。（教頭を見て）何を調子こいて喋っとんねんあのハゲ。アホ、ボケ、カス、死ね」

コソコソと自分の列に戻っていく小春。

１１６大井競馬場・正門前（午後）

立っている二人。涼子、篤希を見やって。

涼子「私服着たらいっそう大人びた顔立ちになるね、白川さん。未成年には見えないわ」

篤希「朝からそればっかり言ってる校長先生」

涼子「ではでは、これより競馬好きのダメ母とそれを見守ってついてきたしっかり者の娘っていう設定でまいりましょうか」

篤希「はい。あの」
涼子「何」
篤希「先生、本当に大丈夫なんですか」
涼子「心配してくれてるの」
篤希「――」
涼子「大丈夫。あなたたちが言わない限り絶対にバレません。じゃあ、入りましょうか」
篤希「はい」
入場する二人。

１１７同・二号スタンド裏
予想屋の小屋がずらっと並び、各予想屋の前には人だかりができている。
涼子「へーえ、こんななってんだね」
篤希「わたしも知りませんでした」
涼子「社会科見学旅行じゃ絶対知ることのできない世界だ」
予想屋の前を歩き始める二人。予想屋一人一人の顔を見て行く篤希。
涼子「あなた、お母さんのお仕事は」
篤希「大学の助教授です。フランス美術史教えてます」
涼子「まあ、そうなの」
篤希「家の中なんか完全にロココ調で。姉二人はそれが気に入ってるんですけど、わたしは……」
涼子「競馬の予想してるんだもんね」
篤希「父が競馬をしてるのはわたしと父だけの秘密だったんです。夜、父の書斎でこっそり二人で次のレースの予想をするんです。すごく楽しかった。ものすごい的中率だったんですよ」
涼子「予想屋さんになるくらいだもんね」
篤希「でもあるとき父の競馬が母にバレちゃって。母、ものすごく怒って。汚らわしい

とか、品性下劣だとか言って」
涼子「汚らわしい、か」
篤希「母の住む世界には競馬とかギャンブルなんて存在しないんです。でも父は競馬やめなくて。ていうか反発するみたいにいっそうのめりこんでいって。二人の仲、どんどん険悪になっていって」
涼子「それでお父さんは家を出られたの」
篤希「はい。予想屋やってるって分かった時に、母は探偵を使って住所調べて、離婚届送ったんです」
涼子「そうだったの」
一軒の小屋の前で篤希の足が止まる。中にいる予想屋をじっと見つめる。
涼子「見つかった？」
篤希「――はい」
小屋に近づいていく篤希。一旦予想が終わり、人だかりがとける。小屋の前に立つ篤希。やがて彼女に気づく篤希の父貞明（52）。
貞明「篤希、か」
うなずく篤希。二人、じっと見つめあう。二人に近づいていく涼子。

１１８同・四号スタンド内、休憩所
扉の外で壁にもたれている涼子。休憩室の中、ベンチに並んで座っている篤希と貞明。
貞明「久しぶりだな」
篤希「うん。お父さん出てったの、わたしが小五の今頃だった」
貞明「――よく分かったな俺のこと」
篤希「お父さんあんまり変わってない」
貞明「篤希は大きくなった」
篤希「小五が高二だもん」

貞明「そうだな。それにしてもおもしろい校長先生だな」
篤希「うん。わたしも本当に連れてきてもらえるなんて思ってなかった」
貞明「お母さんやお姉ちゃんたちはどうしてる、元気か。相変わらずのおフランス？」
篤希「ははっ、うん。絵美里姉さんはお母さんの大学の仏文科行った。樹里姉さんは学校違うけど史学科行ってマリー・アントワネットの研究してる」
貞明「晩飯のときにはオペラのＣＤかけてるのか今も」
篤希「うん」
貞明「あれ、嫌いだったよなおまえ」
篤希「お父さんだって」
貞明「ははっ。友達は？」
篤希「今年になってできた」
貞明「そうか。よかったな。おまえ小学校のとき友達いなかったから心配してたんだ」
篤希「ねぇ、お父さん」
貞明「何だ」
篤希「どうして今頃になって離婚届に判子ついたの」
貞明「お母さん、役所に出したか」
篤希「うん。その日のうちに」
貞明「そうか」
篤希「ねえ、今頃になってどうして」
貞明「変な意地張って、そのままにしてたんだけど――父親が大井で競馬の予想屋やってます、じゃあな」
篤希「え」
貞明「お姉ちゃんたちやおまえにも具合悪いことがこれから先いろいろ出て来ると思ってな」
篤希「そんな、こと……」

貞明「あるんだよ。特に母さんみたいな仕事
してる者の娘ってことになると余計にな」
篤希「考えすぎだよ」
貞明「かもな。でもよかったんだよ、これで」
篤希「わたし、お父さんと縁が切れちゃった」
貞明「え」
篤希「そうでしょ。わたし、お父さんの娘じ
ゃなくなったんでしょ」
貞明「篤希、おまえ」
篤希「そうでしょ……」
篤希、泣く。
貞明「篤希、おまえ自分の名前変だって思っ
たことないか」
篤希「名前が変？」
貞明「だってな、上のお姉ちゃんの名前が絵
美里、下のお姉ちゃんの名前が樹里。で、
おまえは篤希」
篤希「うん。お姉ちゃんたちは『里』がつく
のに、わたしだけは違うから何でって思っ
てた」
貞明「ふふ。上二人の名前はお母さんがつけ
たんだ。エミリーにジュリー、フランス人
女性にもある名前だ」
篤希「……」
貞明「おまえも最初はお母さんが名づけよう
としてた。でもこの子だけはって、おまえ
の名前は俺につけさせてもらった」
篤希「お父さんが」
貞明「うん。篤いっていう字、好きだったし
な。篤情家とか篤志家っていうだろ。それ
より何よりな」
篤希「もしかしてお父さん」
貞明「うん。馬って文字が入る名前の子を持
ちたかった」
篤希「お父さん……」

貞明「嫌いか、篤希っていう名前」
泣きながら首を横にふる篤希。
篤希「おまえが篤希でいる限り、おまえは俺の娘だ」
貞明、篤希の肩を抱き、引き寄せる。
貞明の胸にすがりついて泣く篤希。
篤希「お父さん」
貞明「何だ」
篤希「中央の馬券は買ってないの」
貞明「買ってるよ、もちろん」
篤希「じゃあこの前の宝塚記念も」
貞明「ああ、買ってたけど取れなかったよ」
篤希「取れなかったの」
貞明「ああ。ダイタクヘリオスから人気薄に六頭流してたんだけど、パーマーが逃げ切るとは思ってなかったからなあ」
篤希「へへへ。わたしの勝ち」
貞明「え」
篤希「いろいろあってね、友達四人といっしょに千円ずつ出して馬券買ったの。予想はずっとしてたけど、馬券買ったの初めて」
貞明「予想ずっとしてたって……馬券買ったって……で、取ったのかよおまえあの宝塚記念」
篤希「パーマーの単勝一本勝負でね」
貞明「ありゃあ……」
篤希「お父さん全然だめじゃん。単勝どころか複勝も当てられないくせに馬連買ったりしてる。自分で言ってたくせに、競馬の基本は単勝だって」
貞明「篤希」
篤希「それに、前走勝った逃げ馬が、人気してないときはその馬の単勝買うべき、ってお父さんずっと言ってたのに」
貞明「おまえ、そんなこと覚えてて……」

篤希「覚えてるよ。お父さんの娘だよ、わたし」
強く篤希を抱き寄せる貞明。
貞明「バレるなよ、競馬の予想してることお母さんに」
篤希「うん。大丈夫だよ。勉強だけちゃんとしてれば。お母さんわたしのことにあまり興味ないみたいだしさ」
貞明「……うまくやっていけよ、お母さんやお姉ちゃんたちと」
篤希「うん」
貞明「高校出たらどうするんだおまえ。進学するんだろ」
篤希「理学部に行きたいって思ってる」
貞明「そうか、算数得意だったもんなおまえ」
篤希「うん。とりあえずあの家は出るよ」
貞明「そうか」
篤希「で、大学出ても就職先なかったら、お父さんの助手する」
貞明「ははっ。インテリ女予想屋の誕生だな——おまえ、その友達になんて呼ばれてるんだ」
篤希「アツって呼ばれてるんだ。あ、千里はアッちゃんって呼んでくれてる」
貞明「そうか。いいこと教えてやろうか」
篤希「何」
貞明「おまえアメリーになるところだったんだぞ」
篤希「アメリー？」
ガラス扉の向こう側から父娘が寄りそう様をじっと見ている涼子。

１１９篤希の家の前（夕方）
たむろしているしおり、小春、千里、澪。

千里「あ、帰ってきた」
澪「校長先生も」
　　やって来る篤希と涼子。
しおり「おかえり」
篤希「ただいま。みんな待っててくれたんだ」
小春「会えたん？」
篤希「うん」
小春「そっか」
涼子「これでいいかな、みなさん」
　　涼子を見る五人。頭を下げる篤希。
篤希「校長先生、今日は本当にありがとうございました」
涼子「住所はちゃんと訊いた？」
篤希「はい」
涼子「会いに行く時はお母さんに見つからないようにね」
篤希「はい」
小春「校長先生」
涼子「ん？」
小春「いや、あの、その……あ、今日の朝礼でハゲ……あ、教頭先生が、何か偉そうなことダラダラ喋って、貧血で五人くらい倒れてしもて」
澪「急に何言ってんのよあんた」
小春「いや、とりあえず言っとこかと」
涼子「ご報告ありがとう。生徒倒れてるのに喋りつづけたわけ、教頭先生」
小春「はい。四十分くらい。校訓がどうたらこうたら」
涼子「ハァ……クソハゲが。あんな大人になっちゃダメよみんな」
　　あぜんとして涼子を見る五人。
涼子「さて、急病の校長先生は帰るとしますか」
千里「あの、校長先生」

涼子「ん？」
千里「怖くなかったんですか、今日」
涼子「バレたときのこと考えたりしたら？」
千里「はい」
涼子「『おっ父に会いに行く子に道なんかいらねぇんだよ』」
五人「？」
涼子「何話めだったかな『トラック野郎』の中の台詞。映画の中じゃおっ母って言ってるんだけどね、文太さん。」
小春「……『男の旅は　一人旅～』」
涼子「そんなのも知ってるのぉ。住吉さん」
小春「お客さんで長距離の運転手さんがいて、教えてもらいました。その人が店来るたびリクエストするんです」
涼子「へ～え。あれ、旦那が好きでさぁ。いっしょに観てるうちにわたしも好きになっちゃったのよ。じゃあね、みんな。暗くならないうちに帰るのよ」
去っていく涼子。その後ろ姿を五人、じっと見つめて。
小春「……嘗めてた」
しおり「え」
小春「ホンマもんや、あの人」
篤希「あ」
しおり「どうした」
篤希「表札、できたんだ」
門柱の[白川]という表札をじっと見る篤希。
千里「お母さんの旧姓だよね」
篤希「うん。でももしかしたら近いうちもう一回苗字変わるかも」
澪「何で」
篤希「お母さんつきあってる人、いるから」
四人「マジっ！」
篤希「うん。本人隠そう隠そうとしてるけど

さ、バレバレなんだよね。あの人そういうのすごい下手だから。たぶん同じ大学の教授だと思うんだけど」
しおり「そうなんだ」
千里「まあ、苗字が変わったってアッちゃんはアッちゃんだよ」
小春「そやな、アツはアツや。しかし黒田から白川って。オセロかあんたは」
笑いが弾ける。
篤希「それくらい何よ。もしかしたらわたしの名前、アメリーになってたかもしれないんだからね」
しおり「アメリー、何それ？」
篤希「愛に恵むに里で愛恵里。お母さんがつけようとしてたらしい」
澪「愛に恵むに里で愛恵里ぃ？」
千里「なんかポエム臭すっごい」
篤希「でしょ。今日お父さんから聞いてさ、ぞっとしちゃった」
大爆笑する小春。
小春「愛恵里、アツが愛恵里。ふはっはっはっ」
篤希「――あんた、笑いすぎ」
小春「そやかて、イメージ遠すぎやんアツと。苗字なんぼ変わってもエエけど、アツが明日から愛恵里になったら、うち、つきあい考えてまうわぁ」
笑い続ける小春。笑い、四人に移っていき。
篤希「だよね、わたしと愛恵里、百万光年くらいイメージかけはなれてるよねぇ」
五人、爆笑し続ける。
（F・O）

１２０中、板倉深雪宅　居間（午後）

向かい合わせに座っている涼子と深雪。
それぞれの前に湯呑み。
深雪「で、どうなったんです、前言ってた五人」
涼子「うん。すごく仲良くなった」
深雪「そう。よかったじゃないですか」
涼子「うん。わたしはきっかけ作っただけだけど」
深雪「でも、それって結局先生の自己満足ですよね」
涼子「――うん、そうね」
深雪「それとも贖罪のつもり、かな」
涼子「――」
静かにお茶を飲む深雪。
涼子「あれ、見せてくれる」
深雪「もう、いいですよ。やめましょうよ」
涼子「お願い。見せて」
立ち上がる深雪。部屋を出る。色紙を手に戻ってくる。手渡す深雪。涼子、じっとそれを見る。
〈さようなら・板倉深雪さん　二年五組一同〉と大きく書かれ、深雪を死者としてあつかうクラスメイトの文言・悪口が書き連ねられている。その中央には「死んでくれて　ありがとう　あの世へ進級おめでとう　早川涼子」の文字が。
深雪「先生は一年間ありがとう、進級おめでとうって書いただけ」
涼子「――」
〈色紙の修正液の部分が大写しになる〉
深雪「勝手に文字を消されて加えられただけ、だから先生に罪はない」
首を何度も横に振る涼子。
深雪「罪はないんです、先生には。わたしが

無視されたりいじめられたりしてたって、ずっと一人ぼっちだったって、気づいていなかった先生は、有罪でも無罪でもないんです」
涼子「――」
深雪「それに、机の中に入ってたこれ見た時、そんなショックじゃなかったんですよ。授業中、回し紙で同じようなこといつも書かれてたから」
涼子「――」
深雪「もう、だから嫌なんですこれ見せるの。わたしすごく性格悪くなっちゃうから」
涼子「ごめんなさい。あなたにはいくら謝っても――」
深雪「ああ、ダメだなあ。わたし先生と話してるとどんどんイヤな女になっちゃう。はは」
深雪「あ、そうだ。わたしね、恋人できたんですよ」
涼子「え、ほんとに」
深雪「はい。この前始めて抱かれました。三十歳にてロストバージンです。あ、これその時二人で初めて行った旅行で買ったお土産なんです。先生も食べてください」
菓子の包みを開き、お茶を飲む深雪をじっと見つめる涼子。

１２１同・玄関先
二階通路の手摺にもたれて、帰っていく涼子を見下ろしている深雪。
深雪「先生」
深雪を見上げる涼子。
深雪「あの寄せ書き、ずっと持ってるつもりだったけど、今から捨てます」
涼子「――」

深雪「何か今日決心ついちゃった。彼に見つけられたら、嫌だから」
涼子「うん」
深雪「先生」
涼子「なに」
深雪「もう来ないでください。来てもドア開けませんから」
涼子「――うん」
深雪「先生」
涼子「なに」
深雪「わたし、大好きな人とセックスしました」
涼子「うん」
深雪「さよなら、先生」
部屋に入る深雪。
佇む涼子。

（F・O）

122高校・二年二組（放課後）
教室を出て行くしおり。

123同・廊下
歩いていくしおり。後ろから小春が駆けてきてしおりの横を過ぎる。
小春「しおり、お先ぃ」
しおり「あ、小春ぅ。みんなでカラオケ行かない？」
小春「悪い、今度にして。急にレッスン入ってん」
走っていく小春。
しおり「ふ～ん」
小さくなるその背中を見送るしおり。

124同・校舎裏
誰もいない。しおり、無人のベンチを

見てぼーっと立っている。

１２５同・図書室

入って行くしおり。大机の少し前までいく。勉強をしている篤希と千里。しおり、ふたりの前までいく。

しおり「よっ」

千里「ああ、しおりちゃん」

しおり「どうしたの、千里最近えらく熱心に勉強してない？」

顔を見合せ微笑みあう千里と篤希。

篤希「千里ね、先生目指すことにしたんだって」

しおり「先生――何の」

千里「小学校。難しいのは分かってるんだけど。わたしそんな勉強得意じゃないし。でも浪人覚悟で今からだったら、頑張れるかなって」

しおり「小学校の先生――いいよ、千里。すごくいい」

篤希「うん、いいよね。わたしもそれ聞いたときすごくいいって思った」

千里「へへ、ありがと。だからね、アッちゃんはわたしの専属家庭教師。分からないとこ訊きまくり。分からないとこばっかだからずっと訊きまくり。迷惑かけてます」

篤希「迷惑なんかじゃないよ、全然。教えるのってさ、すごいこっちも勉強になるんだよね」

しおり「へ～え。で、アツもいっしょに。お馬じゃなくて」

篤希「うん。さすがに脳ミソの使う部屋違うからさ。それにわたしもそろそろこっちの方にも力いれようかなって」

千里「予備校の週末講習に行くことにしたん

だって、アッちゃん」
しおり「そっか。じゃあ、頑張って」
軽く手を振りあう三人。図書室を出て
行くしおり。

１２６バス停
帰宅するしおり。バス停に澪が立って
いるのを見つけ近寄る。
澪「ああ、しおり」
しおり「澪、バス通学だったっけ――ああ、
そっか」
澪「うん。前のジムは駅行くまでに寄れたん
だけどさ」
しおり「どう、今度のジム」
澪「うん。由香トレーナーにみっちりしごか
れてる」
しおり「そっか。千里もまだ通ってんの？」
澪「うん。前ほどのペースじゃないけどね。
むちゃくちゃのフォームでバッグ打ちして
喜んでるわ」
笑う二人。
しおり「あ、バス来た」
停車するバス。乗り込む澪。
しおり「んじゃ」
澪「うん。また明日」
ステップに立つ澪、バス停に立つしおり。
しおり「しゅしゅしゅ！」
おもむろにパンチを繰り出すしおり。
澪、笑って
澪「しゅしゅしゅ！」
澪もパンチを繰り出す。
バスのドアが閉まる。二人、手を振り　あって。
去っていくバスをじっと見送るしおり。

１２７帰路

ひとり歩くしおり。

１２８ゲームセンター

モグラたたきをするしおり。

１２９しおりの家・居間（夜）

円卓を前に座り夕飯を食べているしおりと弟の光太（13）。テレビには『平成教育委員会』が映っている。

母親の置手紙を手にしてちらっと見るしおり。

（置手紙・裕子の声）〈急なシフト変更で、九時までレジに入らなくてならなくなりました。先にご飯食べていてください。お父さんも遅くなるそうです〉

骨付き鶏腿肉を掴み、ため息をつくしおり。テレビを見て大笑いをする光太。

しおり「うるさい、黙って食べろ」

光太「なんか機嫌悪いね姉ちゃん、生理前？」

光太の頭を思い切りはたくしおり。

光太「ってえなぁ！　心配してんのにぃ」

しおり「何の心配よ！」

光太「昨日保健の時間に習ったんだよぉ、女の人は生理前になると精神的に不安定になって不機嫌になることがあるから、生理前の時男は気をつかってあげないといけないって。だから生理前かって訊いてやったのに」

また思い切り光太の頭をはたくしおり。

光太「いってえ！」

しおり「生理前生理前言うなバカ！　何が生理前だ！　あんた生理前って言いたいだけだろ、エロ中坊！」

光太「……やっぱり生理だ」

しおり三度目のはたき。今度は身をか

わす光太。しおり、ガブリと腿肉にかぶりつく。

１３０同・彼女の部屋

仰向けに寝転がり頭上に掲げた「写ルンです」を両手でこねまわしているしおり。尾崎豊の『存在』がかかっている。

ベッドから起き上がるしおり。

１３１同・居間

しおり、部屋の入口に立ち、卓袱台に伏せてうたたねしている裕子を見る。

つきっぱなしのテレビ。

しおり「お母さん」

気づかない裕子。

しおり「お母さん」

裕子「んぁ？」

振り返りしおりを見る裕子。

しおり「お父さんまだなの」

裕子「『毎度毎度のお誘いに～　いやだいやだでホホホイのホイ』ってね。ま、あの人の場合、いやだいやだじゃないんだけど」

しおり「そう――あのね、お母さん」

裕子「何、何か頼みごと？」

しおり「なんで分かるの？」

裕子「ふふ。座ってみそ、座ってみそ」

しおり「みそって……」

裕子の前に座るしおり。

１３２校舎裏

ウサギ小屋はなくなっている。ベンチに座って競馬雑誌を読んでいる篤希。

その隣で英単語を覚えている千里。体操服の澪がシャドーボクシングをして

いる。そこへやってくる小春。
小春「しおりは――ああ、バイトか」
篤希「うん」
千里「お母さんの勤めてるスーパーだっけ」
小春「うぅん。最初はあの子もそのつもりやったらしいけど、オカンに断られたんやって。そやから別のスーパーに面接に行って採用された。惣菜部やて」
千里「なんで？」
小春「親子が同じ職場に居てたらどうしてもお互い甘えが出るからアカンって言われたらしい」
篤希「カッコイイ、しおりのオカン」
小春「なあ、カッコエエよな――しかし、なんかここ、寂しなったなあ」
地面に置いたタイマーが鳴り、動きを止める澪。
澪「ははっ、あんたが言う？」
小春「何ぃ」
篤希「ははっ、ねぇ」
小春「何ぃ」
千里「ありがと、小春ちゃん。小学校近いし、またみんなで会いに行こうよ」
小春「うん――にしても、しおりが居てへんのも変な感じやな」
篤希「確かに」
千里「ねぇ、しおりちゃん居なかったら、どうなってたんだろうね、わたしたち」
小春「何や急に」
澪「ああ、それわたしも思うことある」
篤希「しおりだったからだよね」
小春「え」
千里「どういうこと？」
篤希「だからさ、もしもこの中の誰かが最初に校長のミッション受けてたとしたら、こ

うなってたと思う？　わたしたち」
千里「――わたし、ここでまだヒメややすべえ飼ってるだろうな、ひとりで――うぅん。六匹とも死んじゃってるかも知れない、あの時」
　　黙りこむ四人。
千里「あのさ、この五人の中で十七歳なのって、しおりちゃんだけなんだよね」
篤希「え、そうなの？」
千里「うん。前に訊いたことあるの。四月三十日がしおりちゃんの誕生日。みんな、まだだよね」
小春「うわ」
千里「うん」
澪「え？」
小春「うちより一年近い姉ちゃんやんか、しおり」
篤希「あんたいつよ」
小春「年越えて三月二十五日。あんたは」
千里「あっちゃんは十一月十八日。みぃちゃんは十二月の三日」
小春「千里そんなことよぅ覚えてるなぁ」
千里「だってみんなの誕生日だよ、気にならない？」
小春「いやぁ……」
篤希「まぁ……」
澪「ねぇ……」
千里「あのさぁ、そうゆうとこみんなのよくないとこだと思うよ、わたし」
小春「あんた、ほんま言うようになったな」
千里「ちなみにわたしの誕生日は来月、十月の九日。みんなちゃんと覚えておいてよね」
篤希「そうか、しおりがいちばんのお姉ちゃんか」
澪「ねぇ」

小春「ん？」
澪「しおりに会いに行ってみない」
千里「え」
澪「なんかさ、わたしあの子が十七歳だって
　知ったら、急に会いたくなった、今」

１３３スーパー外景

１３４同・中
　店内を歩く四人。
　白帽、白衣のしおり、スイングドアか
　ら、コロッケの乗った台車を押して出
　て来る。
しおり「いらっしゃいませ～」
　離れてしおりを見ている四人。彼女た
　ちに気づくしおり。
しおり「うわっ！　何あんたたち！」
小春「そんなビックリせんでもええやん」
　四人、しおりに近づき向いあう。
しおり「何笑ってんのよ、小春」
小春「いや、意外とよぅ似会ってるなあ思っ
　て」
しおり「このダサい格好褒められて喜ぶって
　思うわけ、あんた」
千里「しおりちゃん、かわいい」
しおり「千里まで……」
篤希「ほんとだよ」
しおり「え」
澪「最高。かっこいいよ」
しおり「――あのさぁ、なんて答えたらいい
　か分からないんだけど。てか何であんたた
　ちここに来たのよ」
小春「十七歳のしおりに会いに来た」
しおり「はぁ？　何それ。何なの、みんな。
　何か気持ち悪いよ。ほんと意味分かんない

んだけど。わたしさぁ、今からタイムサービスのアジフライ揚げなきゃなんないんだよ。掃除もしなきゃならないしさ……」
微笑んでしおりを見つめる四人。不思議そうに四人を見るしおり。

135××高校・校長室（放課後）
執務をしている涼子。職員室に繋がるドアから横山が入ってくる。
横山「校長先生、そろそろお出かけにならないと校長会に遅れてしまいます」
涼子「分かってます」
横山「お忙しいようでしたら、わたしが出席させていただきますが」
涼子「いいえ、けっこう。ちゃんとわたしが出席させていただきます」
立ち上がる涼子。
涼子「あ、教頭先生」
横山「はい」
涼子「校庭に建てるって言ってた校訓の石碑の件、どうなってます」
横山「ああ、はい。予定通り来月からＰＴＡと教職員、及び同窓会に呼びかけて寄付を募ります。足りない分は本年度予算の中から捻出するという方向で……」
涼子「それ、キャンセル」
横山「は？」
涼子「校訓、変えますからそのハナシはなし」
横山「校訓、変える――あの、校長何をおっしゃって……」
涼子「全校生徒から新たな校訓の案を募ります」
横山「新たな校訓――、そんな、勝手な。井上前校長が決められた素晴らしい校訓を……」

涼子「勝手に井上が決めた校訓でしょうが」
横山「……」
部屋を出て行こうとする涼子、振り返って。
涼子「分からない？　生徒ぶっ倒れ続けてるのに喋り続ける誰かのネタにされるようなクソみたいな校訓は、変えるつってんの」
ドアを思いきり閉めて出て行く涼子。
茫然と立ちすくむ横山。憤然とデスクを蹴りつける。痛がる。

１３６帰路
学校から帰っていく五人。
しおり「しかし千里のリクエストも変わってるよねえ」
千里「へへ、そうかな」
篤希「わたし、行ったことない」
澪「わたしは子供のとき何度か」
小春「うちは大阪居てるときけっこう行ってた」
千里「実はわたしも初めてなんだよね～。でも全員大丈夫な日でよかった」

１３７路地～銭湯入口
路地を折れる五人。銭湯ののれんが出ているのが見える。
小春「こんなとこに銭湯あったんや」
千里「うん。いつか来たいなあって思ってて　さあ」
銭湯を出てすぐのところに湯上りの男（三十代前半）が一人立っている。女が出て来る。深雪である。五人の足が止まる。
小春「お、逆『神田川』」
篤希「『いつもわたしが待たされた～』ってや

つ？」
しおり「うん。お風呂ってさ、たいてい女の方が長いもんだよね」
二人寄りそう。手を繋ぐ。
千里「きゃ」
身を寄せ合い、二人を見る五人。
歩き出す二人。五人の横を過ぎる。
羨望の眼差しで二人の後ろ姿を見ている五人。
澪「いいなぁ」
篤希「澪でもやっぱりそう思うんだ」
澪「悪い？」
入口前まで来る五人。
しおり「はぁ～あ、仕方ない。わたしたちは千里の十七歳を祝して、女どうしで裸のつきあいといきますか」
千里「仕方ないって、ひど～い。しおりちゃん」
賑やかに女湯ののれんをくぐる五人。
路地を折れる前、深雪の足が止まる。
振り返る深雪。もう五人は銭湯の中に入っており、誰もいない。それでもじっと銭湯入口を見つめ続ける深雪。
男「？」
深雪「(ううん)」
首を横に振る深雪、いっそう男に寄りそう。手を繋ぎ身を寄せ合い、歩いていく二人。

１３８銭湯・脱衣場
脱いだ制服、下着が入っている五つの籠が並んでいる。

１３９同・男湯・浴場
初老の客が一人。頭を洗っている。

１４０同・女湯
湯船に肩まで浸かっている五人（向かって左から千里、澪、しおり、小春、篤希）。
千里「一九九二年十月九日、手塚千里、晴れて十七歳になりました！」
四人「いえ～い！」
拍手をする四人。

１４１同・男湯
驚いて上を見上げる男。

１４２同・女湯
千里「将来は小学校の先生になりたいです！えーっと、でもなんとなく無理っぽい感じも正直……」
篤希「無理とか言わない！」
澪「うん。千里なら絶対大丈夫」
千里「ありがとう。頑張ります！」
四人、また拍手を送る。
小春「住吉小春、まだまだキュートな十六歳！」
篤希「だれがキュートだ！」
小春「やかましぃ！　将来の夢は日本レコード大賞、日本有線大賞、日本歌謡大賞の三冠獲得！」
千里「いけるよ絶対！」
拍手する四人。
しおり「『あの、は、初めまして。住吉小春です』」
爆笑する四人。
小春「それもうやめろっ！　次アツ！」
篤希「白川――旧姓黒田篤希！　次に十七歳になるのはわたし。それからもうすぐたぶん青木篤希になりま～す！」

小春「白の次は青かい！」
篤希「とりあえずの夢は――えーっと、今初
　めて言うけど、東京大学理学部物理学科合
　格！」
四人「お～～！」
　　どよめきながら拍手する四人。
千里「あと狙うはノーベル物理学賞？」
篤希「冗談、馬券必勝法の確立に決まって
　るでしょ！　そんで社会人になったら競馬
　場行って全十二レース的中させてやる！」
四人「お～～！」
　　拍手する四人。
澪「菅原澪。十七になるのは十二月。夢は―
　―」
　　言葉が続かない澪。
澪「夢は――」
四人「アリスぶっ倒す！」
　　頷く澪。
澪「その後は、由香トレーナーといっしょに
　キック続けたいから、たぶんこの街で就職。
　いつか大会に出て勝ちたい。プロにもなっ
　てみたい。そのずっと後は由香トレーナー
　みたいなキックのトレーナーになりたい。
　キックと一生つきあっていきたい」
　　拍手する四人。
しおり「本庄しおり、十七歳」
　　拍手する四人。
しおり「正直先のことあまり見えてない。な
　りたいものとかもない。たぶん、短大とか
　に行って、フツーに一般企業に就職するん
　だと思う」

１４３同・男湯
　立ちあがって女湯の方の天井をみあげ
　ている男。

１４４同・女湯
しおり「恋愛とかするのかな、やっぱり。そんで結婚して、仕事やめて、子供産んで、子育てして――その後はまた、今と同じスーパーにパートで入って、コロッケ揚げたりしてるかもしれない、わたし。何かつまんないね」
篤希「どこが」
千里「そうだよ」
澪「つまらなくなんかちっともない」
小春「そんな人生がつまらへんのやったら、うちが歌う歌になんの意味もない」
しおり「――うん」
篤希「お寿司、上手に巻けるようになった？」
しおり「いやぁ、それがなかなか難しくてさ」
千里「お店に出せるやつができるようになったら教えて。みんなで買いにいくから」
しおり「うん。でもわたしの今の夢、巻き寿司ちゃんと巻けるようになることかぁ。なんだかなぁ」
小春「だから、そういうのが大事なん！　きよし師匠も言うてるやろ。大きなことはできませんが、小さなことからコツコツと、や！」

１４５同・男湯
男、拍手をする。
男「おねえちゃんたち、がんばれよ！」

１４６同・女湯
千里「やだ、聞こえちゃってた」
澪「そりゃそうだよ」
小春「おっちゃんありがとう！　聞いてたやろ、今日千里誕生日やねん！　あがったら

フルーツ牛乳おごって！」
男（声）「よっし。任せとけ！」
笑う五人。
千里「でも恋愛かぁ」
小春「そやなぁ、さっきみたいなん見せられたらなぁ。考えてまうよなぁ」
澪「うんうん」
篤希「よぉし、じゃあ今日から競争だ。だれが一番早く彼氏作るか」
しおり「あの～……」
おずおずと手を挙げるしおり。
千里「何、しおりちゃん」
しおり、俯いて黙っている。
小春「……ちょっと、もしかしてあんた」
しおり「うん。あのさ、わたし三日前にコクられちゃった」
四人「えぇ～～～っ!?」
画面、ホワイトアウト。

147エンディング
小春（声）「どっどど、どういうことやっ！」
しおり（声）「どういうことって、まあ、そういうことなんだけど……」
篤希（声）「あっ、相手、相手だれよっ！」
しおり（声）「誰って、バイト先の……」
澪（声）「と、年はっ!?」
しおり（声）「同い年、△△高校の二年……」
千里（声）「で、ででっ、な、何て、何て返事したの、しおりちゃんっ!?」
しおり「いやまあ、ちょっと考えさせてほしいつって、待ってもらってんだけど。『考え中、考え中』みたいな――ねぇ、もういいじゃん、この話し」
四人（声）「よくないっ!!」
ザバッ！　四人が立ち上がる湯の音。

篤希（声）「もっと詳しく教えなよっ！」
しおり（声）「――もう。だからぁ、その子は青果部のバイトなんだけど。何回か休憩室でいっしょになって。音楽の話しとかしてたら、向こうもオザキのファンで、何か盛り上がったりして。それからいろいろ話すようになって」
篤希（声）「で、どうやってコクられたのよ！」
しおり（声）「いや、まあ、その日遅くなってさ、家まで送ってくれたんだけど、そのときつきあってほしいって……」
千里（声）「きゃあああっ！　送られて告白！きゃあああっ！」
澪（声）「それだけっ!?」
しおり（声）「なんか、一目ぼれとか言ってた……」
千里（声）「きゃあぁぁっ！　一目ぼれっ！きぃやあああぁっ！」
篤希（声）「そんで、そんでどうすんのよあんた!?」
しおり（声）「どうするって？……」
澪（声）「だから返事っ！」
しおり（声）「いやまぁ……断る理由もないのかなと……」
千里（声）「……決めてんじゃん」
澪（声）「受けるつもりだ」
篤希（声）「うん。顔がすでににやけてる」
しおり（声）「いやぁ、そんなことは――」
小春（声）「何で、何で黙ってたんよっ！」
しおり（声）「何かタイミングが……だから、今、言った」
篤希（声）「あーっ！『恋愛とかするのかな』とかよく言うっ！」
澪（声）「ほんっと、どの口が……」

しおり（声）「いや、恋愛とかそういうのとは……こっちはそういうつもりはないっつうか……」
四人（声）「そういうのなのっ！」
千里（声）「お風呂から上ったらみんなでスーパー行くから！　そんでどんな子か見せてもらうしっ！」
しおり（声）「え～、やめようよぉ」
小春（声）「こっのぉ、しぃおりぃぃっ！」
しおり（声）「きゃあっ、小春っ何するのよっ！」
小春（声）「沈めろ、みんなしおり沈めろっ！」
しおり（声）「やめてっ、もうっ、みんなやめてってばあっ！」
ザバンザバンと湯の音。五人の嬌声が続く。
しおり（M）「あの子にうんっていうのかな、わたし。でもほんとにね、そういうのとは違う気がするんだ。だって小春、千里、篤希、澪。これから先、あんたたちにもしひとりぼっちの夜がやって来たとしたら、わたしに電話してきてよ。彼氏なんかほっぽらかして、何もかもほっぽらかして、わたし、駆けつけるからさ――」
やがてDrop,sの「コール・ミー」が流れ始め、[写ルンです]で撮った五人の数々の写真や、本編の様々な場面が映し出されていく。その中をスタッフ、キャストがせり上ってくる。
（了）

本稿にタイトル・歌詞が登場する歌

・「十七歳の地図」・「僕が僕であるために」・「卒業」
・「シェリー」・「15の夜」・「I　LOVE　YOU」・「存在」
以上、詞、曲、歌＝尾崎豊

・「大阪しぐれ」
歌　都はるみ　詞　吉岡治　曲　市川昭介
・「おゆき」
歌　内藤国男　詞　関根浩子　曲　弦哲也
・「みちづれ」
歌　牧村三枝子　詞　水木かおる　曲　遠藤実
・「夢追い酒」
歌　渥美二郎　詞　星野栄一　曲　遠藤実
・「なみだ恋」
歌　八代亜紀　詞　悠木圭子　曲　鈴木淳
・「まわり道」
歌　琴風豪規　詞　なかにし礼　曲　三木たかし
・「月光仮面は誰でしょう」
歌　近藤よし子・キング子鳩会　詞　川内康範　曲　小川寛興
・「他人船」
歌　三船和子　詞　遠藤実　曲　遠藤実
・「あなたにあげる」
歌　西川峰子　詞　千家和也　曲　三木たかし
・「毎度毎度のおさそいに」
歌　植木等とオフィスレディス　詞　伊藤アキラ　曲　はやし・こば
・「神田川」
歌　かぐや姫　詞　喜多条忠　曲　南こうせつ
・「コール・ミー」
歌　Drop's　詞　中野ミホ　曲　中野ミホ